

終わり良ければ総て良しなんて間違っているだろうか

できてな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは、ある種族の終わりの物語。

つながれてきた命、過去に生きた『彼ら』は・・・私に何を望むのだろうか。

私は、なにを成せばいいのだろうか。

私は、なにを残したい？

初投稿です!!

ダンまちのアニメにドハマりしてしまい、二次創作を漁る日々・・・面白い作品が多すぎて自分も作ってみたいと思ってしまったため投稿させていただきます。

私の趣味をぶち込んでまいりますのでよろしくお願いいたします

!!

この投稿をきっかけに文章力もつけられたらいいなーとも考えておりますので指摘してもらえたらと思います。

目次

第一章

プロローグ

1

一話 いきなり急展開とか、そんなスキルは今の私にはありませんからね

11

二話 レファイヤー視点って書きやすくてとっても楽なことに気づいた俺氏

20

三話 あれ？こんな設定なんてなかったのにおかしいなあ・・・うおーいえい！

29

四話 おつ！ 物語が進んだ様を感じるZE

41

五話 普段はpcからの投稿だが、今日はスマホで投稿してみた・・・ちや、ちゃんと投稿出来てるよね？

53

六話 私はやってみよう精神のある nice guy なんだぜ!?! たぶん

63

七話 戦闘描写ってやっぱり難しいもんなんですわね！ズバーン！シャキーン！ドーン！

73

八話 リヴィラの街の回って書くのすっごく難しいね？時間だいぶ掛かっちゃった！

84

九話 うーん？少し踏み込みすぎたかもしれない・・・ま、いつか！

96

十話 詰め込みすぎた感・・・

108

十一話 今回はラブコメ感だぜ??

125

十二話 アミッドちゃん回 そのいち？

135

十三話 物語が進まん

146

十四話 役割と復讐 珍しく真面目なタイトル!!

159

第一章 プロローグ

『鬼人』

その種族は、極東出身の者であれば馴染み深いものかもしれない。千年も昔という遠い昔に廃れたとされている種族。

時代の流れにより忘れられてしまうのがこの世の摂理というものだろう。

しかしながら、この種族だけは忘れられることなく親から子へと伝えられ続けている。

それも極東のみならず、この世界で最も有名である都市、「迷宮都市オラリオ」の人々でも『鬼人』を知っている者がほとんどである。

しかし、どうしてここまでも世界中に認識されているのか……それは――

『史上最悪の種族』



「ふう、やっと見えてきましたね。迷宮都市オラリオ……ここまで来るのに随分と掛かってしまいました……」

私は、今までの過酷な旅を思い出しながら、安堵の気持ちを込めて口に出す。

隣に誰もいないため、唯の独り言なのだが、

門に着くと検問なのだろう列ができていた為、私もその列へと並び順番を待つ。

待っていると・・・

「えっと、見た感じ商人の様には見られないけど。冒険者の方ですか？」

「は、はい」

門の警備か検問を行っていた人だろうか、青い服を着た女性に話しかけられ、少し驚きながら返事をする。

列に並んでいる人を見まわしてみると、積み荷を引いたり大きな荷物を抱えている人がほとんどである。

それに対して小さくはないリュックではあるが、それ一つである為、商人ではないと判断されたのだろう。それとも、極東で好んで使用されている大小の刀を腰に差してあるためだろうか。

そんなことを考えていると、

「それじゃあ、こっちに来て。冒険者志望なら、所持品とか恩恵も調べなきゃだから」

青い服の女性に連れられて行く・・・

「まずは、所持品から調べるから出してくれる?」「わかりました。」

言われるままにリュックの中身なり、刀などを出した後問題ないと言われたため、それらをしまい直す。

しまい終えた頃に、

「えっと、最後に恩恵の確認を行います。背中をこっちに向けてくれ

る?」

「はい」

言われたとおりに背中を青い服の女性に向ける。

何かの魔道具だろうか、良くわからないものを持っていた。

「うん、恩恵はないみたいだね。大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

問題、はなかったようだ・・・なぜだか少しだけ緊張してしまっていた。

なんとというか・・・悪いことはしていないのに突然、母に呼ばれ叱られてしまうかもしれないと思い、記憶の中から自分の行動に問題はないかと思い出している最中のなんとも言えない緊張のような・・・

リユツクを背負い直し、青い服の女性に一礼をしてオラリオを囲む大きな壁に空いた門をくぐろうと歩きはじめる。

門をくぐると、世界の中心であると聞いた通りに多くの人々がいた。

しかし、なぜだろうか違和感に感じてしまうことがあった。人の多さから圧倒はされているのだが・・・活気?が感じられないように思えてしまう私があった。

それも、都市全体が沈んでいるような、怯えているような・・・そんな空気に感じられた。

「何かあったのでしょうか?それとも普段からこのような都市なのでしょうか?」

私は、オラリオを訪れたのはこれが初めてであるために普段のオラリオの様子は知らなかったためによくわからない。

少し期待が外れてしまっていたために気持ちが悪落ちてしまった気もするが切り替える。

「えっと、まずはギルドに行つて・・・まあ、ギルドに行けばどうにかなるでしょう」

私は極東出身であるため、オラリオの知識に疎くその上、どうしたら冒険者になれるのですら知らないのである・・・

しかし!! 無計画ではあったが目的地であるオラリオに来ることが出来たため、そこからの謎な自信が今の私には芽生えてしまっていたのである。



結局、オラリオに入つて3時間程掛かりギルドへ着いた。

(だいぶ時間がかかってしまいました・・・)

1時間ほど前

私は今迷つてしまっている。2時間ほど前にはあった自信は跡形もなく消え去っていた。

あの青い服の女性に聞けばよかったと後悔に思いながら、ギルドの場所がわからずにキョロキョロしながら周辺をうろついていたところ、綺麗な緑の髪をしたエルフに声をかけられた。

「その極東の貴方、困りごとですか？」

「は、はい。ギルドの場所がわからなくて・・・オラリオには初めてきたものですから」

さつきからキョロキョロとしていた私を見て不自然に思ったのだろう。私は彼女に話しかけられて少しビクツツとして、それからの彼女の問いに恥ずかしさを覚えながら答える。

「そうですね、ギルドは北西の第七区にあります。外観は万神殿です
ので見ればわかると思いますよ。・・・ギルドということは、冒険者
に？」

「ありがとうございます。それと、はい。冒険者になるためにオラリ
オに来ました」

ギルドの場所を教えてもらったことにお礼を伝え、冒険者になるの
かと聞かれたことに対して肯定の意を伝える。

その肯定の意を伝えた時に少しだけ彼女が顔を歪めたように見え
た。そのあと、

「どうしてこのような時期に？」

「・・・？」

彼女の質問の意味が分からずに首をコテンと傾げてしまう。

意味が分からないという私の意図が彼女に伝わったのだろう。よ
り彼女が顔を歪める。

そんな彼女を見て私の頭の中の「？」がいっぱいになってしまう。

「・・・今、オラリオは闇派閥と呼ばれる組織により安全と言えない
状況となっています。力のある冒険者ならまだしも貴方のような新
人の冒険者は、危険な目にあってしまうかもしれません・・・それも
貴方のような女性なら尚更心配です・・・」

真剣な顔をしながら私を説得してくれる。

彼女が教えてくれた闇派閥なるものは初耳だが、オラリオに来てか
らすぐ感じられたあの違和感の正体が分かり少しすつきりした気
持ちになった。

それでも、闇派閥がどれほどのものかは分からないが、引き返すつ
もりはない。

しかし、しかしだ、女性・・・女性かあ、まあ、こんな見た目です

からね・・・しょうがないですか・・・。

ちなみに、私の恰好なのだが極東の巫女が着ている巫女装束によく似た服を着ているこの服を着ていたために彼女は極東の者と判断したのだろう。

髪は長い方だろう背中まで伸びている。また、頭には市女笠と呼ばれる極東の帽子で、笠の周りには互いの顔を認識できる程度の薄い布がかかっているものをかぶっている。

元々女性的な顔立ちでもあるため間違われることはある・・・いや、ほとんど間違われる。そう、ほとんど

まあいいや（ヤケクソ）

「ご心配感謝します。私は田舎の出である為、オラリオの情報に疎いものでして・・・ですが、私には目的がありここまで来ました。いまさら引き返せませんし、引き返すつもりもないです」

私は真剣に自分の意見を彼女に伝える。すると、私の真剣さに驚いたのか彼女は少しだけ目を大きくした。

「そ、そうですか・・・貴方自身がそう決めたのなら私がとやかく言うことでもありません。ですが、困ったことがあれば頼ってください。あ、名乗っていませんでしたね。私は、「アストレア・ファミリア」、ヘリユー・リオンです。よろしくお願いします」

「はい・・・よろしくお願いします・・・あ、その「？」」

「私も名乗らせていただきたいのですが、ここは人が多すぎます・・・ので、少し移動して頂けますか？」

「え、はい」

相手に名乗らせておいて、自分は名乗らないなどあり得ない。

名乗るだけなら出来るのだが、市女笠をかぶったままで名乗ることをしたくなかったのだ。困っていたところに親切にしてくれたリオ

ンに。しかし、市女笠を人前ではあまり外したくはないのだ。

――

人気がない場所へと移動したのち、

名を名乗るために、渋りながらも市女笠を外そうと手をかける。

そんな私の様子を不思議そうに見つめてくるリオンに、

「あの・・・あまり、まだ言いふらしてほしくはないんですが。リオンさんなら大丈夫だと思おうので」

と、言い市女笠を外す。

「!？」

リオンの顔に驚愕が張り付く。私の顔を見てだろうか？布に遮られとはいえ顔は見れていたからそうではないだろう。それも、顔のみでここまでの反応を引き出すのは、相当に難しいものだろうと思うが、まあ・・・リオンがここまでも驚いている理由は分かっているのだが・・・

彼女は、私の・・・

『角』

を見て驚いたのだろう。先端になるにつれて血のような赤黒く濃い色に変化している。不気味にですら感じられるが、どこか美しく魅了されてしまいそうな、その『角』に、

この世界には様々な種族が存在している。

しかも、世界の中心であるこの都市ならば、容易に多くの種族と出会うことが可能だろう。

だが、この額から伸びている『二本の角』を持っている種族となると、出会うことは大変に難しいものとなるだろう。

そんな希少な存在と出会う・・・未知との遭遇による驚きなのか？

それとも『鬼人』と出会ってしまった恐怖、嫌悪の表情なのか：

「はい、驚いてはいると思いますが、とりあえず名前を。私の名は〈紫苑〉、鬼に姓はありませんので。まあ、見ての通りの『鬼人』

です。鬼に頼られても迷惑だと思えますので・・・ですが、助けて頂きありがとうございます」

「え・・・」

まだ目の前の状況が処理できていないのだろう。それもそうだが、目の前に『史上最悪の種族』がいるのだから。恐怖に染められて泣いてしまったり、逃げ出さないだけ比較的良好な反応の部類である。

それにしても長くない？ずっと止まったままにいる。

「まあ、いいですか」と、私は市女笠を被り直す。

「それでは、失礼します」

「・・・あ・・・紫苑さん！」

リオンが何かを言おうとしたのだろうが聞き流し、人混みに紛れていった。



―現在―

リオンと別れた後、すぐにギルドへと向かいギルドに到着した。
やはりギルドだけのことはあり、冒険者らしき服装や装備を身に着けている人が比較的多くみられる。

そのような光景を見ているとワクワクといった感情が湧き上がってくる。

ギルドに入ると、正面の奥に受付らしきものが設置されていて職員だろう人が座している。

適当に受付に座る、

「あの、すみません。冒険者になりたいんですけど、対応お願いしてもらってもいいですか？」

「はい、冒険者登録でよろしいですか？」

ファミリアに所属していて恩恵を持っていることが条件となるのですが……」

「その……ファミリアにどうしたら入れるのかとか、恩恵とかもよく良く分かかっていなくて」

「それでしたら~~~~~」

それから、受付の女性が様々なことを丁寧に教えてくれた。

例えば、ファミリアに入るためには各ファミリアごとに入り方は違うらしいが、とりあえずそのファミリアの主神に気に入られればいいらしい。

難しいらしいが……

規模が大きく、力のあるファミリアほど入るのは難しくなるため、比較的小規模のファミリアならば入れる可能性が高いとのこと。

それとどこのファミリアの主神だろうと、恩恵に違いは無いらしい。

それでも、力を得るため、名声などを得るためには力のあるファミリアに

入った方が良いということは必然である。

弱いチームに所属するよりも強いチームに所属する方が良質な経

験を得られ、効率的に無駄なく自分を成長させることが出来るだろう。

受付の女性の説明を聞いた後、ファミリア所属を目指してギルドを出た。

◇◇◇

ここが【ロキ・ファミリア】ですか・・・

一話 いきなり急展開とか、そんなスキルは今の私にはありませんからね

―地下迷宮49階層【大荒野】―

大気を震わせるのは多くの、地面を踏み・駆ける音。甲高い音色を奏で、ひと際目立つその音は金属製のものが別の物体との接触により発生される音であろう。

ダンジョンとは地上とは違い地下に存在している。そのため、広い空間であろうとも周囲を覆われていることは必然である。

そのために音は反響しこの凄まじい大戦のBGMをより心震わすものとなつている。ここまでも大きな音に囲まれての戦闘となると、どこから聞こえてくる音なのかも分からず、情報処理が追い付かずに少々のパニックを起こしてしまうこともあり得るだろう。

そのような凄まじい大戦劇を演じているのは・・・方や隊列を組み理的な戦術を駆使し、相手の突撃に対応し、耐え抜いている小さきもの・・・【人間】。

一方は山羊のようにねじれ曲がった二本の大角、首から上に膨れ上がった馬面とでもいえる醜悪な顔面・・・【フォモール】。

盛んに吹き出る鼻息と呼応するように、真っ赤な眼球がぎよろぎよろと蠢き、獲物とみなした人間へと躊躇なく襲い掛かる・・・

戦況を見てみると人間側がやや押されているところ。見る限りでも、フォモールの軍勢は人間の軍勢に対して数倍もの数である。それも、人間と体格さでは比べるまでもない。

それでも均衡状態を維持できているのは恩恵は前提として、指揮の練度の高さ、それに隊の強い連携度が影響しているのだろう。しかしながら、劣勢であることに変わりはなく、いつ隊列が崩れフォモールに蹂躪されてしまうのも時間の問題であろう・・・

「きゃっ」

私の、目の前の隊列が崩された。

前から押され、私の軽い体は吹き飛ばされてしまう。吹き飛ばされた衝撃により強打された体の痛み顔に顔を顰めながらも立ち上がるため、上半身を起こそうとしたその瞬間。

フォモールが私に向かって大きな天然武器を振り下ろそうと迫る。

第二級冒険者でLv3ではあるのだが私自身、魔導士であるために耐久にはそれほど自信がなく、しかも此処は深層であるためにモンスターの強さも比例し強くなっている。

そんなモンスターの攻撃を受けてしまえばただでは済まないだろう。逃げ出そうにも私の俊敏では不可能だ。この状況の中で私が出るること・・・衝撃に耐えようと身をすくめる。

(痛いだろうな・・・)

これから来る痛みの想像に恐怖に、嫌悪を浮かべる私。

その時だ・・・まばたきをする前には視界の額に大きく描かれていた「恐怖」が大きく袈裟斬りになり、塗りつぶされ消えてしまっていた。

その上から描かれたのは・・・大小の剣を両の手にそれぞれ手に持ち、体全体を回転させながら斬り抜く。回転により腕に垂れた振袖なるものが、ふわあつとたなびく。同じように長いスカートのような袴も揺れ、すこし捲り上がり・・・降ったばかりの雪のようにこもった冷たいでいて美しい足が覗いてしまっていた。

これは戦闘、戦いというには魅力的すぎた・・・それはまさ

に————

『舞』であった。

その『舞』は、どこか儂げでしかし、そこにまた魅了されてしまう。
・・・そんな妖艶で美しい『舞』

「レフイーヤちゃん・・・大丈夫ですか？」

「・・・」

「もしもし」

「!? す、すみません」

どうやら、先ほどの『舞』に魅了されてしまっていたらしく、放心状態であつたみたいだ。

私は惚けてしまっていた顔の頬を両の手で押さえながら慌てて、窮地を救ってくれた彼女に対して言葉を発する。

すると、彼女は「よかつた」と頬を緩ませながら私に言う。

そんな安堵に浸っている中・・・

「ちよつと、アイズ!! どこまで行くの!?!」

どこからか聞こえた、仲間の驚きの込められた声。その声が聞こえた後、敵側正面左側が何やら周りとは比べてもより大きな音を上げながら揺れている。

そんな様子を見てから「ああ、もう・・・」と彼女が呆れのこもった様子で呟く。そしてすぐに揺れている方向へと跳んだ。

あつという間に大戦の中へと吸い込まれる彼女を見つめていた・・・

――

視界を埋め尽くすのは私よりも大きな身体をした黒い怪物（フォモール）。

そんな怪物が密集した場所へと私は単身で切り込んでいる・・・

（・・・まだ まだ足りない もっと強く 強くなりたい

限界の頂天を超えて はるか先の高みへ）

そんな思いが頭の中から、心の奥から吹き上がってしまおう。

余計なことは考えない、目の前の敵を一掃しようとしてより敵の中心地めがけて進んでいく。

敵を斬りながら進んでいく・・・敵の中心地周辺へと近づいた。

しかし少しの違和感にここで気づく、

（モンスターが少なくなっていく）

私は間違いなく敵の密集していた場所に向かって進んでいたはずだ。にもかかわらず、明らかに敵は減少してきている。私が斬った敵もいるだろうが、だとしても数が合わないのだ。

不思議と違和感に少々心を揺らされるものの、冷静になろうと心を落ち着かせる。

敵を斬り続けながらも冷静さを取り戻し始めた頃に耳に入ってきたのはふ、フォモールの大群による大きな音のなかに紛れる「スパンツ」といった爽快な音が重ね重ね響いている音。この音・・・。私の武器「デスペレート」といった真つすぐに伸びた剣では出せない音。極東に伝わる武器「刀」のみでしか鳴らすことの出来ない音。そんな音が近くから聞こえてくる。考えるまでもなく戦闘を行っているのだろうか・・・

敵の密集していたこの場所まで来ることが可能であり、私以上に敵

を減らすことが出来る。そして、使用している武器が極東の「刀」
ここまでも情報があれば十分すぎるほどに誰なのかが分かってし
まう……

正体が分かり切った彼女が私に大きな声を上げ叫ぶ

「アイズ！ そろそろリヴェリアさんの詠唱が済むはずです。引きま
すよ!!」

「……うん」

予想よりも敵の数が少なくなっていたために、少し残念な気持ちを
残しながらも彼女の命令に従い、自陣へと向かって跳び上がる。
すると、その瞬間にフォモールの大群を囲むほどの巨大な魔法円
が出現し、巨大な火柱を立ててフォモール総てを灰へと変えてい
く。離れていてもジリジリと焼かれる感覚を覚えるほどに高火力で
ある。

焼かれた辺りは何も残っておらず、そんな規格外な光景に少し圧倒
されていた。

少しの間、立ち尽くしていたところ……「ポン」と何者かに肩を
叩かれた。

後ろを振り向くと笑顔の表情をした、小人族である「ロキ・ファミ
リア」の団長がいた。

(……なんか、こわい……)

1 地下迷宮50階層1

49階層でのフォモールを退け一つ降りた50階層を野営地の拠
点としてテントを張っている。その中の一つ、周りのテントに比べて

ひと際大きなテントがある。

そのテントに私はいるのだ・・・正座をさせられて・・・

「何故呼び出されたかわかるかい？　アイズ」

「・・・うん」

「ロキ・ファミリア」団長であるヘフィン・ディムナへに言い方はまったくもって強くないのだが、それでいて圧のかかっている声により萎縮しながら答える

私が呼び出された理由。それは、確実に前線維持の命令を無視してフォモールに向かって突撃していったことだろう。

「ならば話は早い。　どうして前線維持の命令に背いたんだい？

アイズ、君は確かに強い。だからこそ君の行動は是非を問わず下の者に影響を及ぼすんだ。　わかるだろう？」

「・・・」

自分自身、上の者（幹部）であるという意識ももちろんある。そして先ほどの彼の話も理解はできている。だからだろう、私は黙っていることしか出来ないでいた。

静まり返ったテントの中、彼がまた喋ろうと口を小さく開く。

「・・・窮屈かい？　今の立場は」

「・・・ううん、ごめんなさい」

そう言い、謝罪の言葉を発した。彼の今の言葉にはどこか私に刺さってくるものがあつた。わかつてはいる。ここはダンジョン、私の一番は仲間を守ること。無茶をしてはいけない・・・わかつてる・・・のに、止まることができない・・・《どこまでも　私は強くなりしたい》　、そう思ってしまったわけにはいらなかった。

私の反省の色が彼に伝わったのだろう・・・先ほどまでの真剣な表情が緩み、

「うん。大丈夫そうかな。なら以上だ、キャンプの準備にもどつてくれ。・・・そうだ、後で〈紫苑〉にも一言伝えておいてね。だいたい機嫌悪そうにしてたよ。余り表には出してないけどね」

彼の言葉に「うん」と一言返しテントから出る。

(紫苑にも怒られちゃうのかな・・・)

これから起きるだろうことを想像しながら・・・

――アイズがテントを出た後

「・・・心配だな」

ぽつりと、先ほどテントから出たアイズに向けての言葉だろう。

その言葉を発したのは「ロキ・ファミリア」副団長である、エルフのヘリヴェリア・リヨス・アールヴだ。先ほどの49階層でフォモールを灰へと変えた魔法を放ったその人である。

彼女の言葉に対してフィンが「そうだね・・・」と肯定する。

「あの子はひた向き過ぎる。強さを求めるあまり誰もついて行かない場所に独りで行ってしまいかねん・・・」

「はあ どうしたものかなあ・・・」

「ふう 困ったものだ・・・」

そんな二人を少し引き気味にみている一人のドワーフ。彼はフィンとリヴェリアと「ロキ・ファミリア」創設時からの付き合いである。名をヘガレス・ランドロック

アイズについて悩んでいる二人に思うこと・・・

「お主らふけとるのー 見た目若いのに・・・」

ー

「シ・・・紫苑さん。先程は助けて頂いてありがとうございました。・・・それと、いつも足引つ張ってしまって・・・その、すみませんっ」

頭を下げられてしまっている。私は「うん、うん。大丈夫だからさ、頭上げて？ね？」とレフィーヤに伝え、頭を上げさせる。

レフィーヤ、彼女が「ロキ・ファミリア」に所属した時に指導係としてリヴェリアさんと共に指導している。

私は「刀」を日頃から帯刀していたり戦闘でも接近戦が多いため魔法は使えないと勘違いされがちなのだが・・・リヴェリアさんには火力は劣るものの同レベルの上級魔導士には負けないだろうと自信がある程度は魔法が使えたりする。

それでも、都市最強魔術師であるリヴェリアさんがつくのだから十分なように思うのだが、上が決めたことだ、逆らいはしない。

最初こそはこちらが話しかけなければコミュニケーションが取れないような状況ではあったが今では先ほどのように話しかけてもらえるほどに、いや、それ以上に打ち解けられているかもしれない。

レフィーヤが顔を上げると涙目になってしまっていて、今すぐにも流れ落ちてしまうほどだ。

レフィーヤは少し自分に対してスティックになってしまっていることがある。頑張れることは大切で必要な部分ではある。それでもこの様な顔になってしまうまで自分を追い込んでしまうのは良くない。

私はレフィーヤにフォローの言葉を伝える。

「レフィーヤちゃん、あの時はしようがないように思うよ。前線の隊列の人達が悪いとは思はないよ。彼らも自分にできることを全力でこなしてたと思うからね？でも、それはレフィーヤも一緒じゃない？だから、そんなに自分を追い込まないで？・・・ね？」

彼女を泣かせないようにと伝えたのだが、彼女の綺麗な目から涙が零れてしまったため、人差し指を軽く丸め、涙をすくいとる。

彼女はエルフだというのに喜怒哀楽が激しすぎたり・・・現在、彼女の目じり辺りを触れているのに嫌がろうとしなかったり・・・エルフとして大丈夫なのか？と思ってしまふことが多々ある。ついには・・・

レフィーヤがふらつと前へ足を運ぶ。私とレフィーヤ簡単に腕の届く範囲にいたために前へ進まれてしまえば、0距離となってしまう。

とんつ

私の胸にレフィーヤが頭をぶつける。視線を下げると見えるのはレフィーヤの頭、私は黙って左腕でレフィーヤの肩を包み抱き寄せ、右手で優しく頭を撫でる。この時の私の思ったこととは・・・

(そういえば・・・アイズにしっかりと注意しとかないと!!)

二話 レフィーヤ視点つて書きやすくてとつても楽なことに気づいた俺氏

私は、現在地下迷宮51階層を進んでいる。

今回の遠征の目的の一つでもある、『ディアンケヒト・ファミリア』からの冒険者依頼・・・ヘカドモスの泉より要求量の泉水を採取することを目的としてのダンジョン探索の最中である。

一つの泉から採取できる泉水の量は少量であり、また、クエストに割く物資も時間も最小限に抑えたいとの理由からパーティーを二組に分け、少数精鋭として二つの泉からそれぞれが採取することとなった。

私のパーティーはというと・・・アイズさんに、アマゾネスである姉妹のテイオネ、テイオナさんである。

私の予想としてはリヴェリア様がどちらかパーティーとして参加するのかと思っていたのだが、キャンプの護衛につとめるとのこと・・・リヴェリア様の代わりとなって私が参加するとなるとだいぶ荷が重いように思ってしまう。それでも・・・

(リヴェリア様の代わりとなれるように一生懸命頑張ろう!!)

・・・と思うのだが、いまいち集中力に欠けてしまっている・・・
何故だろうか？ それは、昨日のある出来事が頭の中から浮かび上がったまま消えてくれないのだ・・・

「ああっ!! どうして私はあんなことっ!？」

「あーああ・・・レフィーヤまだ言ってるよー」

私が羞恥心からなる叫びを口に出して叫んでしまう。そんな私の様子を起床してからというもの、さんざん見せつけられているアマゾネスの妹、テイオナが呆れと可笑しいものを見ているように続ける。

何が私をここまで私を苦しめているのか・・・それとは

(紫苑さんに泣き顔を盛大に晒した拳句、「とんっ」なんて頭を彼女の胸に預け抱き寄せられて撫でてもらうなんてーあぁ、もうっ!!)

「つう~~~~うう」なんて叫びを押し殺すように湧き上がってくる羞恥心を抑え込もうとするも、押し付けた羞恥心は顔に集まり頬を真っ赤に染め上げてしまう。

その顔を見て「顔真っ赤w」とテイオナが吹き出し、笑い始めてしまう。

別に良くは無いのだが、私が紫苑さんに行った行動はひとまず横に置いておこう。だが、問題は私の行動を誰か、他の団員数名に見られていたらしく、私と紫苑さんが食事を取ろうとして団員の集まっていた簡単なつくりであるキッチン周辺に向かっていた時には既に私の行動が痴態として団員達に周知されていて・・・イジられた・・・

イジられる前までは、泣き顔を見せてしまったことなどは恥ずかしくはあったのだが、それよりも憧れで尊敬する彼女に優しい言葉で励まして貰い、抱き寄せ、撫でて貰えたことによる嬉しさの方が大幅に上回っていた。

それなのに・・・周りからのイジリにより、私の中の幸せな情景が一気に唯の私の痴態へとなり下がってしまった。

この事が今の私の頭の中を支配しており、集中力欠いてしまっている原因である。

・・・それでも一つだけ私の痴態のおかげか、良いことがあったのだ。それは・・・

私が団員たちのおもちゃにされている時であった。 紫苑さん・
・彼女が笑ったのだ。

もちろん、普段から笑みを浮かべているところを見かけすることはあるし、私の目の前でも微笑む様子を見ることはあるのだが・・・

その時の彼女は「ふふっ・・・」と少し声を漏らしながらの笑みだったのだ。その彼女の笑みを見たのは居ても数人だったであろう程にほんの少しのそれであった。

そんな笑みは彼女の心からの 『本物の笑み』 のように感じられた。

そう、普段の彼女の笑みは・・・私の勘違いなのかもしれない・・・
・・・・それでも、

どこか 『歪』 な様に見えて仕方がないのだ。しかし、あの一瞬のそれを私は心の中に大切にしまい込んだ。

そんな、思わぬ副産物があったために悪いことだけではなかったと思うのだ。

ところで、私を狂わせる等の本人はというと・・・リヴェリア様と一緒にキャンプの護衛を行うとのことと一緒ににはなれなかった。

リヴェリア様は、魔導士であるために攻撃を仕掛けるのに少々の間がかかってしまう。そこで近接戦闘も行える魔法剣士の紫苑さんがキャンプに残ることで万が一を防ぐ、といった理由らしい。

もし、また紫苑さんと一緒にいてしまったら。また新たに黒歴史なるものを刻んでしまいそうで、パーティーを組めなかったことを良かったと思うのか、悪かったと思うのか良く分からない・・・

51階層に入ってからそう短くない時間が経過していた。予定ではもうそろそろで目的地であるへカドモスの泉へに到着する頃合いである。

しかし、違和感がひとつ・・・

「・・・おかしい 静かすぎる」

「アイズ!?」「ちよっと!!」

へカドモスの泉のある壁、床、天井を土や石などで造形された大きな部屋のような空間を前にして、その場所に居座っているだろう、モンスター「強竜」^{カドモス}を倒すためにパーティーで最終確認をしながら部屋に突撃する機会を伺うために入口近くに待機していた時だった。

アイズが無防備にも歩くように部屋へと歩みを進めていつてしまう。

そんな彼女の行動に焦りと驚きを込めて言葉を発するアマゾネス姉妹。

しかしながら、アイズの言った通りに巨大なモンスターである「カドモス」が居るにしては明らかに静かすぎている。

先に行ってしまったアイズを追いかけるように彼女等は部屋に向かって走っていく。

そして、視界に映るものは・・・

「これって・・・カドモスの死骸!?!」

視界に広がっていたのは山のように積もっているモンスターの灰。これほどの大量な灰となると、考えられるのは「カドモス」ではない。

しかも何故だか周囲から香るのは肉を溶かしたような不快感を与えてくる匂い。そんな異臭に彼女等は顔を顰めてしまう。

「カドモス」を彼女等のファミリア以外で討伐することの出来る冒険者となると、それなりに限られてくるのだが・・・不可解な点が

あつたのだ。

「ドロップアイテムが回収されてない・・・」

ティオネが高額で取引されるほどの「レアアイテム」である「カドモスの被膜」をつまみ取りながら他の三人に伝える。

冒険者の収入源としてはモンスターの体内から得られる魔石を換金することで得るのが主である。

また、得られる確率は低いのだが、稀にモンスターの体の一部が灰へと変化せずに残る、ドロップアイテムが発生することがある。それは種類にもよるが、魔石よりも大幅に換金率が高いものがほとんどである。

その中でも「レアアイテム」となると入手できる確率は著しく低い分、その換金率は破格なのだ。だからこそ「カドモスの被膜」が放置されていることが明らかに異常なことであるのだ。

そこで考えるのは、なんらかの「イレギュラー」それはきつと、モンスターによるものではないか、そう考えるのが妥当なのであろう。彼女らがそれに気づき、確信し始めた頃であった・・・

「ああああああ!!」

ダンジョンに響く若い男の叫び声。

「いまのは?」

「ラウルの声!!」

「ごっちー!」

その叫び声に反応した彼女等は、走り出す・・・目的の方向へと近づきにつれて巨大なものが速い速度で這いずり進むような音が大きくなっているように感じる。

通路を駆け抜け、向かいにかかる通路に行き着くと右方向から巨大な芋虫のような姿をしたモンスターに追われ走り向かってくる、フィン先頭としたもう一組のパーティーが見える。

レフィーヤは巨大な異形なモンスターを見て「いつ芋虫!？」と驚愕な表情を浮かべながら悲鳴が含まれたように叫ぶ。

そんなレフィーヤの横からモンスターへ向かって飛び込む者がいた。その者を見てフィンが叫ぶ。

「止せ ティオナ!!」

モンスターに向かって飛び込んだ速度のままに彼女の専用武器である〈大双力〉^{ウルガ}を突き刺す。突き刺した箇所から溢れ出るはモンスターの体液。それが飛び散ったときと同時に声が響く

「体液に触れるな!!」

またもフィンの声であった。その声にティオナは従い、反応してそれを浴びないようにと避ける。身体には何も異常はない。しかし右に持っていた〈ウルガ〉が一瞬いして溶けていく様子に慌てて〈ウルガ〉を投げ捨てる。

この状況を見て、フィン達のパーティーに先ほど合流したばかりの彼女等も、芋虫の形状をしたモンスターの危険性、特異性は十分に理解ができたであろう。

後から大量の同形のモンスターが迫るのを目で撮れえ、全力で逃走をはじめめる。

逃走を続けながらも、フィンがこの状況を脱するための作戦を説明し始める。

このような窮地だとしても冷静に状況を判断し、常に最善手を導き出す経験力。複雑な迷路を把握する記憶力。躊躇なく行動に踏み切る判断力。

そんな彼の作戦に従わない者などいるはずもなく、それぞれが彼の指示に従い行動に移す。

――

迫りくるモンスターをアイズ、フィンを中心にして進行を何とか食い止める。

モンスターの突進をいなしながらフィンがある者の名を叫ぶ、

「レファイヤ!!」

―数分前―

走りながら団長の作戦の説明を受けている……

「武器を使用しての効果は薄いし、こちらの被害の方が大きいものとなるだろう。ただし、魔法なら別だ。詠唱をするだけの時間を稼いで群れを殲滅できるほどの強力な魔法を打ち込めたなら……」

……えっ? えっ??

―直近―

前方でアイズさんや皆さんがモンスターを抑えてくれている。

長引けばみんな危ない……

私の能力ちからを役割を……

みんな私を信じてくれてるんだ 怖い……けど！

私は全身全霊で 私にできる事を!!

フィンさんの声が聞こえた、その声に答える。

「撃ちます!!」【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」

(これが……私の全力です!!)

その光は強い輝きを放ちながら前方のモンスターに向けて高速で伸びていく。無数のその光たちはそれらを一体も残さずに消滅させる。

その衝撃に砂埃が大きく立ち、視界を閉ざしてしまう。砂埃が落ち着き、視界が晴れたため、辺りに撃ち漏らしたモンスターがいないかと確認するため周辺を見回す……モンスターは居ないようだ。

それに安堵の気持ちで力が抜けてしまい膝を折ってしまう。この時の私の思考の中には、役割をこなせた安心。それと、

(紫苑さん褒めてくれるかな……)

私の魔法で皆の窮地を救うことができた。などと説明したときにはきつと、彼女は私をこれほどまでもか、と思うほどに褒め回してくれるに違いない。

(……もしかしたら『笑って』くれるかもしれない……だと、いいな……)

窮地を脱せたことにより暖かい空気が流れている中―

「全員、全速力でキャンプに戻る」

フィンの命令に従いキャンプへと引き返す。迷宮から脱し地上へと着き、キャンプの方向へと視線を向けるとキャンプのある場所には先ほど彼ら、彼女らが戦闘を行ったモンスターと同一のものであろうモンスターで埋め尽くされていた。

それを目撃した彼ら、彼女たちは驚愕の表情でいる。

その中の一人、アイズ・ヴァレンシュタインが彼女唯一の魔法である「エアリエル」を発動させ風のようなそれを身体に纏わせキャンプ目掛けて駆け飛ぶ、「エアリエル」により大幅に向上されたスピードによりあつという間に見えなくなってしまう。

フィンは彼女が魔法を発動させたときに彼女を冷静にさせようと思いをかけようとしたが、その前にはもう既に飛んでいてしまっていた。

もう止められないことを察して、残された戦いに参加出来そうな者達にアイズに続くよう指示を送る。

「ティオネ ティオナ ベート!! 来い!!

奴らを 駆逐する!!」

三話 あれ？こんな設定なんてなかったのにおかしいなあ・・・うおーいえい！

地下迷宮50階層 ダンジョン 「ロキ・ファミリア」キャンプ地

フィン、アイズ達が「ディアンケヒト・ファミリア」からの冒険者依頼を達成するために「カドモスの泉」を目指し51階層に向け出発した。

その後、数時間が経過した時であった。

今まで見たことのない、新種と思われるしき芋虫のような形状をしたモンスターが大量にキャンプ地を目指し迫ってきた。

新種であるために、モンスターの体液が武器をも溶かすほどの強力な溶解液を持っているなどの情報を知るわけもない。

本来ならば新種など未確認のモンスターに対しては十分に注意をしながら対処するべきなのだが、多くの時間を費やしてしまえば押しつぶされ、キャンプは壊滅し団員達にも被害が出てしまうかもしれないほどにモンスターの数が多かった。

そのような理由もあり情報を十分に得られないまま、モンスターを対処しようと向かって行った魔導士以外の団員、約半数以上がその液を浴びてしまい、戦闘不能状態へと陥ってしまった。

「ロキ・ファミリア」の魔導士を総動員して大規模な魔法を放てば、視界を埋め尽くすほどのモンスターを一掃することは可能であろう。しかし、大規模な魔法となると絶大な火力を出せる代わりに相応な時間を消費しての詠唱が必要不可欠なものとなる。

それも、いつもならば頼れる「ロキ・ファミリア」の誇る第一冒険者達がいる。

彼らならば詠唱にかかる時間を十分に稼いでくれることだろう。

しかし、現在彼らはいないため頼ることができない。

さらに、今戦闘可能な団員は大幅に削られてしまっている状況なのである。

・・・この状況を切り抜けるための方法として挙げられるのは大きく三つ程であろうか、

一つ目、犠牲を出さない手段として撤退を行うこと・・・しかしながら負傷者もいる状況での撤退となると厳しいと考えられる。

二つ目、本来ならば戦闘可能な団員達を後のことを考慮しても数十程度は残しておきたいのだが・・・惜しんでしまえばモンスターの対処は困難となるため、この状況を切り抜けるためだけを考え、総動員で押し止めてもらう。

それでも厳しいと考えられるが、その間に彼らが合流することが出来れば切り抜けられるだろうが・・・不確定なものを頼りに指示を送るような楽観的な思考は持ち合わせていない。

三つ目、この方法が最も対処に現実的な作戦であるのだが・・・

「冒険者依頼遂行するのに作戦会議を行っていた時」

私はフィンが「紫苑はキャンプに残ってもらう」の判断をしたことに少し意外な心情を持った。

紫苑は魔法剣士であるために汎用性が高く、「カドモス」の様なモンスターが相手でも安定した戦闘をこなす事が出来るためである。

普段のフィンならば、下手な損害を生まないためにも保険のように、多く紫苑を活用していたりする。

そんな彼が保険を比較的安全なキャンプにかけたとなると、キャン

プに何かが起こると感じたのだろう・・・彼の勘は良く当たる。信用に値するまでの今までの経験があるからだ。

今、私はあの時の彼の判断にこの上ない有り難みを持っている。私には彼の判断のお陰ではつきりとした一本の勝ち筋が見えていくから・・・

「氷は現実 花は理想」【どうか氷に咲き満ちて】 リヴェリアさん
！ 魔法、撃ちます!! ・・・【氷華散乱】!!」

視界を満たすのは氷の花畑・・・細かな花たちは紫苑を中心にして咲き溢れ、まるで花の香りを振り撒く様に小さな氷の粒子を揺れるたびに空気中へと漂わせる。冷やされた空気を肌で感じる。まるで別の世界へと誘われたようにも感じる神秘的な光景に心を奪われてしまう・・・

――

(リヴェリア 紫苑、みんな・・・！)

51階層から出てから見えた、あのモンスター達に襲われていたキャンプの光景。

先ほど戦い・体験したからこそ分かる、あれの凶悪さ。

たとえ遠征に参加している冒険者たちが第二級が多く配属されていたとしても対処は厳しものと考えられる。

最悪の状況を想像してしまいがちながらもキャンプへと向かう・・・

キャンプまで残り僅かな所、私はある光景を目にする、

(・・・氷の壁??)

モンスターがキャンプに乗り込もうとするその前方には盛り上がった巨大な丘の様な氷でできた壁。その壁はモンスターの進行を見事なまでに押しとどめている。

それでもモンスター達は前へ前へと同族たちを踏み台にして上へ登り始める。しかし不自然なことに、登り上がったモンスターは動きを止めてしまう・・・停止したと思った矢先、そのモンスターは新たに氷の壁の一部となっていく・・・

そこで気づく・・・あの氷の壁はモンスターで作られた壁だということに。

ー約15分前 キャンプ ー

いきなり出現してきた新種のモンスター。その新種は凶悪なことに体液すべてが強力な溶解液なのだそう・・・

剣などの武器では使い物にならず、剣が使用できたとしても新種を傷つければ体液が飛び散り返って相当なダメージを負ってしまうかもしれない。

極めつけは、倒し切ったとしても新種の体が爆散し体液をまき散らすといったものらしい。

(ひびく ひびすぎ・・・)

新種についての情報を報告してもらった時に私はそう思った。

報告を聞いた後、リヴェリアさんと作戦会議を行う・・・

ーリヴェリアさんとの新種、対処の作戦会議中上がった条件

魔法でしか有効な攻撃手段しかないこと。

魔法で倒したとしても爆散しては被害が出てしまうため、体全てを消す程の火力であること。

動ける団員が少ないため少人数での対処が可能なこと。

・・・このような条件が上がった。

幸いにも魔導士の被害は殆ど無く、一帯の新種を塵もなく消し去ることは可能であるとのことであった。

問題は詠唱を完成させるまでの時間の確保のみである・・・少しの間、考え込んだ後、ある方法が思いつく。

「リヴェリアさん・・・時間の確保、私に任せてもらってもいいですか？」

「!!・・・聞かせてもらっていいか？」

私の時間の確保の目途が立ったという発言に驚きの反応を示した後すぐに、いつもの表情に切り替わる。

いつもの表情となった彼女の問いに簡潔、かつ丁寧に答えた。

対処の方法とは、

リヴェリアさんとの会議で上がった条件である、新種を倒すためには爆散してしまうことを防ぐために体全てを消し去ること。というものだが、その条件を少しだけひねる。

まず、今必要なのは時間だ。簡単に考えると新種の進行を止め続けるだけ十分ということだ。

要するに、新種を倒さなくてもいいということだ。その場で動きを止め続けられれば事足りるのだ。

それを実行するを可能にさせるのは私の魔法の一つ【氷華散乱】である。この魔法は氷を出現させたり物体を凍らせるといったものだ。単純ではあるが汎用性が高く私のお気に入りの魔法なのである。

この魔法でどう対処するのかというところ……

まず、前線にいる新種を凍らせて動きを止める。前の新種を凍らせたところでそれを這い上がり後ろに続いている新種たちが進行してくるだろう。それもまた、キャンプ内に侵入する前に凍らす。この繰り返しである。

それならば新種一帯を全てを凍らせてしまえば？と思うだろう。・確かに広範囲に氷を張ること自体は【氷華散乱】でも可能である。しかし、氷を張らせるためには私を中心としてしか行えず。範囲が大きいほどに凍らせる為の火力は下がってしまう。

新種の動きを完全に止めることが出来る火力が出せるのは前線が最大なのである。

リヴェリアさんは私のこの方法を聞いたときに美しい顔に少し眉間にしわを寄せて何やら考えている様子であった。

そんな彼女の様子に自分の考えに至らない点があったのかと思考を巡らそうとするも、

リヴェリアさんに「……………それで頼む」と実行の許可を得る。

作戦会議が無事に完了した後、私たちはその作戦を直ちに実行に移した。

ー現在ー

(うん……大丈夫そうだね)

私は少し安堵の気持ちを心の中でこぼす。

ここまでは、ほぼ私の想像通りに事が進んでいる。後ろに視線を送るとリヴェリアさんを中心として魔導士部隊が詠唱を唱えている。耳を傾けるとその詠唱も終盤であることに気づく。

(もうすぐだから・・・)、と疲労感で十分に回らなくなり始めてしまっていた頭を気合で働かせる――

【ロキ・ファミリア】魔導士部隊 一斉砲撃!!

私の目の前の巨大な壁もろとも爆炎に包まれ消失していく・・・
爆炎により視界を覆っていた煙が晴れ、新種の群れが一掃された光景をとらえた団員たちは歓喜の声を上げはじめ、盛大に盛り上がる。

――

「チツ！ なんだよ終わってんのかよ、」

「まあさ、私も暴れたかったけど・・・被害が抑えれたらしいからいいんじゃない？」

ベートがすでに終わってしまった戦いに対し愚痴をこぼす。それに対し、テイオナが戦いに参加できなかったことに対して残念に思いながらも最悪な状況にならなかつたことに「良かった」と思う。

彼らがキャンプに着いた頃、団員達が新種との闘いに勝利した歓喜に盛り上がっている最中であつた。

――

「紫苑さん・・・本当に大丈夫ですか？」

「うん。 ホント少し精神力使いすぎちゃただけ・・・だからっ・・・」

私がアイズさん達に遅れてキャンプに到着した時、団員たちは集まってワイワイと騒いでいるのだが。紫苑さんの姿を見ていなかったのだ。

リヴェリア様は団長にキャンプで起こったことの報告をしているのを見た。が、肝心の紫苑さんは居ない。

(・・・もしかしたら)と思い至って、紫苑さんのテントへと足を運んだ。

テントの前へ立ち、「紫苑さん、いますか？」とテント越しに声をかける。

すると、

「・・・レフイーヤ？」

と、彼女の声が聞こえたため、入室の許可を取りテント内へと入った。

彼女を見ると膝を抱え、ちよこんと座っていて私の方へ上目遣いで私の顔を見ていた。

そんな彼女を見て(つつーっか、かわいいです)なんて頭の中でのたうち回るも表情には出すまいと表情を崩さないように耐える。

紫苑さんに座るように促されたため前に正座で座る。なんだか緊張してしまって・・・

彼女に「・・・足、崩しても大丈夫だよ？」と聞かれたが「い、い

えこのまままで」と答えてしまう。

「それで、どうしたの?」

と彼女が私に質問を投げかける、それに「キャンプに戻ったら、紫苑さんを見かけなかったの・・・。」と返答する。

彼女を探していた当初は、ただ彼女と一緒に居たいからといった理由なのだったが、全く見つからない彼女を心配に思っていまい、少しの焦りを感じながらの搜索となっていた。

結局、見つかったので目的はすでに達成しているのだ。

「ちよつと眠くなっちゃってね?」

私の言葉に彼女はそう答えた。

そんな彼女の表情を良く見てみると、眠気というよりも疲れだろうか。それもそうだろう先ほどまでモンスターと戦っていたのだから。しかし、普段から疲れさえも表情に出さない彼女のこの様な表情を見たのは初めてかもしれない。

疑問に思い、彼女に問う

「紫苑さんは、あのモンスターの戦闘の時なにを?」

私の質問に淡々と彼女は答え始める・・・その内容に、恐ろしい話をされているかのように驚愕と恐怖を覚えてしまう。

51階層を出た時に見えただけでも相当な数であったモンスターをほぼ一人で詠唱を完成させるまでの間ずっと抑え込んでいた。それだけでも大変に驚愕なものではある。

しかし、それ以上に驚愕よりも恐怖を覚えこと・・・それは、抑え込むのに使用したと言っていたのが「氷華散乱」であるということだ。

何が、そこまで問題なのかという・・・

彼女の【氷華散乱】そのものの火力・能力が極端に低いということだ。

確かに、ステータスやレベルの上昇によって火力・能力を向上させることは可能である。しかし、火力・能力を補うにも限度というものがあるのである。

以前、彼女が普段から多用している【氷華散乱】がどの様な魔法であるのか詳しく知りたくなり、教えてもらったことがある。

彼女の話によると、【氷華散乱】が発現したのがLv1の後半だったらしい。今では綺麗な花が咲き溢れるが、その頃はただの冷風が吹く程度であったの事。

この時点でしつかりと発動しない魔法など、言い方は悪いのだが《欠陥》のように思えてしまった。

それからLvも上がって火力・能力も上がってはいるようだが、消滅させられるのは中層のモンスターが限界だという。

ならばどの様にして新種のモンスターに対抗できるほどに火力・能力を上げたのか・・・

私は詳しくは分からないのだが、彼女が潜在的に持っていたものを使っているとのこと・・・スキルや魔法なのではないらしい。実際、彼女自身もよく分かっていないのだそう・・・

しかし、それを行うことにより消費してしまうものがある。

【大量な精神力^{マインド}】

である。元々彼女のマインドの量は相当多いのだがマインドダウン寸前まで使用したのだろう。

マインドがあるのならば大丈夫だろうと魔導士以外はそう言うだろう。

確かにマインドの量が多ければそれなりの回数、使用することが可

能ではあるだろう。

しかし、そこが問題なのではない、問題はそれが一瞬で消費される
ときの感覚である。

その時の感覚はというと、腹の中の内臓が浮き上がり、また吐き気
を起こす不快な感覚でその上、脳を揺らされるような感覚もあり、そ
の上から重い倦怠感がのしかかってくるのだそう。

ちなみに、幸いにも私はそれに陥ったことはない。

そもそも、この現象を起こすためには相応な大規模の魔法を得てい
る必要があるため、起こせる条件がそもそも難しいものなのだ。

リヴェリア様は軽い症状なら起こしたことがあるようで、普通に吐
いたらしい・・・丸一日倦怠感が抜けなかったようだ。

リヴェリア様があそこまで嫌な顔をして話す姿はそう見ることは
できないであろう。

「紫苑さん・・・本当に大丈夫ですか？」

「うん。ホント少し精神力^{マインド}使いすぎちゃっただけ・・・だからっ
・・・」

紫苑さんが顔を歪ませたかと思ったら・・・横に倒れてしまう。

「紫苑さん!? 大丈夫ですか!?!」

慌てながらも、倒れてしまいそこから動かない彼女のもとへと寄り
・・・急ぎ、息と心拍を確認する・・・問題ない。気を失ってしまっ
ただけの様だ。

それでも、私の前では堪えていたのだろうか。気を失った彼女はう
めき声を紡ぎ始め、汗もかき始めている。

そんな彼女の苦しそうな様子を見ると・・・

(これも……『本物』なのかな? ……え?)
あれ??)

――

「団長命令――、撤退だ――、キャンプを破棄 最小限の荷物を持つて離脱!!」

号令係である団員がキャンプの総員に向けて団長の命令を伝えるため大声で伝えて回る。

四話 おっ！ 物語が進んだ様に感じるZE

【ロキ・ファミリア】 本館^{ホーム} 黄昏の館

「あー疲れたー お肉たくさんほおばりたーい」
「私はシャワーを浴びたいわね」

キャンプに戻って、これからの方針についてをリヴェリア、ガレスと共に話し合う最中のことであった。

急に親指がうずき始めた・・・このうずきが起こるときには大抵ナニかが起こる。

これに少々不安感を抱いた時であった。

地面が大きく揺れ始め轟音がダンジョンに響いた。

何事かとテント内から飛び出す。すると、先ほど戦闘を行った新種と同形と思われる姿形であったが、問題はその大きさであった。

あのような巨大なものが暴れ、それも・・・あの溶解液を含んでい
る可能性を考えてしまうと、悲惨な光景が簡単に想像できてしまう。

戦闘を行えば大きな損害を出してしまうと判断した僕はすぐに
キャンプを破棄しての撤退を指示した。

撤退の判断にベート、ティオナが反対するが、押し切った。

しかし、撤退を行おうにもそれまであの巨大な新種を抑えてもらう
必要があった。

そして、あの凶悪なモンスターを野放しにするわけにもいかない。

撤退の時間を稼ぎ、倒すことが可能であろう人物・・・
アイズにその役割を任せた。

彼女は見事なまでに役割を果たしてくれたため、損害無く撤退に成功することが出来た・・・

その後、地下迷宮^{ダンジョン}17階層にて遭遇したミノタウロスの大群が上層へと逃走するといったイレギュラーはあったものの他の冒険者に被害は確認次第なかったようだったため問題はないだろう。

そのような多くのイレギュラーに相對したが、団員たち全員、誰も欠けることなく地上への帰還に成功したのである・・・

そして帰るは僕たちの本拠^{ホーム}であった。

「おつかええええ〜〜りいいいいいっ!!」

門が勢いよく開かれ帰還した彼らへと大声を出しながら走り迫ってくる女性が一人。

彼女は彼らに近づくと大きく腕を広げながら飛び上がる・・・

その彼女を見て先頭にいたアイズ、アマゾネス姉妹らは冷静な様子でヒョイと体を逸らす。

飛び上がっていた彼女は勢いそのままに地面へとダイブする。

しばらく沈黙していた彼女はいきなり、がばっ！と起き上がり・・・

「あれ!? いつもなら快く紫苑たんが受け止めるか、避けられないレファイヤがおもちやにされてくれるの!!」

と、ぶつけて赤くなってしまった鼻を赤くしながら叫ぶ。続いて地面に座り込みながら顔を上げて「二人おらんやん、なんかあったん?」とフィンに問う。

彼女の問いに「紫苑がダンジョン内で気を失ってしまっただ

気絶してるだけみたいだけど。まだ意識が戻らなくてさ【ディアンケヒト・ファミリア】ヘレフィーヤに連れて行かせたんだ」と不備なく答える。

彼の発言に「そうかいな・・・」と不安の表情をうかべる。

だが、そんな表情も一瞬で切り替わり団員（女性）に向かって、手をワキワキさせながら次々に迫っていった。

――

（ああ、また・・・ここか、）

私は揺さぶられる頭とひどい倦怠感を感じながら瞼を開ける。

すると、揺れる視界の先に映るのは無機質な天井であった・・・

この場所にいることを考慮するにレフィーヤと居た時に気を失ったのであろう。

その後、ここへと運ばれた。そのような流れであろうか・・・

（ここ・・・あまり好きじゃないんだけどな、）

この状況を察して、私はただへさえ気分が相当悪いため下がっている気持ちをより低下させてしまう。

そんな時に・・・扉を数回叩く音が聞こえ、一人の女性が部屋に入ってくる。

「・・・意識が回復した様ですね、おはようございます。気分はいかがですか？」

彼女は【ディアンケヒト・ファミリア】へアミッド・テアサナーレである。

私が「ディアンケヒト・ファミリア」の病室が苦手な理由それが・
・彼女なのである。
別に彼女のどこかが嫌いとかその様なものは全くない。

・・・私が彼女と距離を置きたいのは、彼女が数少ない私を初対面で忌避の反応を示さなかった者だからである。

彼女との初めての出会いは5年程前だったように思う。

今の様に、体を酷使しすぎてしまい。意識が飛びそうになりながらも「ディアンケヒト・ファミリア」に治療を行って貰おうと血だらけの体で本拠へと向かったのだが・・・

『鬼人』である私に治療を施して貰えるなど絶望的であった。

そう思い、本拠の前の隅で入るのを渋って立ち尽くしていたところにだ・・・

彼女が現れた・・・その後、治療を行うことに対して反対していた団員を無視し、私を癒した。

その魔法に、『氷』を優しく溶かすような、優しい温もりを感じた。

ーそれが初めての出会いであった。

「そういえば、先ほど「ロキ・ファミリア」の方たちが此方にいらしておりましたよ。冒険者依頼クエストの件でしたが、皆さん貴方を心配しておりましたよ。特にあなたを連れてきたエルフの少女は特に・・・」
「そうなんですわね。・・・レフィーヤが私を運んで来てくれたんですか？」

「ええ」と答える彼女に「・・・早く退院してお礼をしなくてはいけませんね」と返した後、

先ほどまで、緩んでいた顔を引き締めた表情に変えた彼女を見て私は緊張を覚える。

少しの沈黙の後、閉じていた彼女の口が開く・・・

「・・・また、使用しましたね？」

「・・・はい・・・でも使っても別に・・・」

何を使用したのか・・・「精神力マインドを消費しての火力・能力の底上げ」であろう。これを使用したとしても反動は起こるが後遺症と思われるものは今のところ発症していない。

「ロキ・ファミリア」の一員としてダンジョンに潜るとなると、私の魔法では足りないことが多いため普段から「それ」を使用しての魔法を多用している。

今回の症状は相手と状況が最悪であったためにいつもよりも上限を大幅に上げたことによる反動による為である。

しかし、彼女は「それ」の使用を容認できないらしく・・・時折同じ症状に陥り治療を受けに運ばれる私に毎度のこと、使用を控えることを説教のように伝えてくる。

そんな彼女の優しさをいつも裏切ってしまうことに心を痛めてしまおう。

診察が終わったらしく「・・・では、私は他の仕事に移りますので、」と部屋から退出していった。

彼女が退出し、一人になった私はある人物を思い浮かべてしまう・

この場所に来るのが苦手なのはアミッドさんがいるからと伝えた、確かにそれは真実であるがそれだけではない。

それは・・・アミッドさんのように、私に忌避を示さなかった……「彼女」を思い出してしまうからである。

「彼女」はアミッドさんとは全く違う性質であった。

逆までには行かないがそんな感じ。

それでも同じ・・・優しさを持ったひとであった。

（ああ、まただ・・・毎回毎回・・・慣れないんだよな……）

私はベットの途中で膝を抱えるように横になりうずくまり・・・

声を押し殺しながら、

泣いた。

―その日の夜 豊穣の女主人にて―

「よっしやあ ダンジョン遠征みんなごくろうさん!! 今日ほ宴や!
飲めえ!!」

「「乾っ杯ーー!!!」」

【ロキ・ファミリア】の主神の言葉からその団員達は大いに盛り上がっていた。

今日の団体客である【ロキ・ファミリア】は私の職場である「豊穣の女主人」の常連の客だ。

今では店のウェイトレスとして働いてはいるが、元冒険者であった。

その頃に私の所属していた【アストレア・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】は少し、交流があつたため、団員の一部の者であればお互いのことを認知している仲ではある。

しかし、やはり彼女が見当たらない……

私は今日、【ロキ・ファミリア】の予約があることにほんの少し期待を込めながら彼らの来店を待っていた。しかし、宴が始まってもしやほり彼女が来ていない。

【ロキ・ファミリア】が来た時にもほや習慣となりつつあるこのやり取り

「……リヴェリア様、すみません……紫苑は今日も?」
「ああ、リオンか……それはーーーーーーーーーー」

リヴェリア様の話によると体調不良により来られなかったらしい
・・・
遠征で何かあったのか、とも思ったがそれは分からない。

(心配ですが・・・また・・・会えませんか)

「また」というのも、ここ数年彼女と会ってすらいないのだ。年に何
回か、今日のように「ロキ・ファミリア」が団体で来店する。

私がかここへ働き始めて最初の彼らの来店時には彼女はいた。

私は彼らが来店することは予約に入っていたために(もしかしたら
・・・)と、思っていたので驚きはしなかったのだが、彼女は私が働
いていることを知るはずもなく、私の存在に気づくと・・・店を出て
しまった。

それからは、彼女は店には一度も来ていない。そして町でも会うこ
とはないため、根本的に避けられていると考えられる。

それでも予約が入るたびに思ってしまうのだ。

――

「おおお!! 紫苑たんおかえりー!!」

目が覚めたその二日後、私は本拠^{ホーム}へと帰ってきた。

無事に退院できたことをまず、主神であるへロキンに報告するため、
彼女の部屋へと向かった。

部屋に入ると私の顔を見たたんには、ロキが此方に向かって飛び込

んでくる。その彼女を私は受け止める。

「そうそう！これやこれ!!」

何やらロキは嬉しそうに声を上げている。

十分に堪能できたのか抱いていた腕をはなし、私から離れる。

私がどの様な経緯で気を失ってしまったのかもすでに彼女は知っていたようで、「あまり無茶をしないように」と、くぎを刺されてしまった。いつもお茶にかけているようであるが、稀に見せる彼女の真面目な表情、今の彼女はまさにそれであった。

彼女から本当に私のことを心配して言ってくれているのが強く伝わってくる。それに対し「・・・すみません」と反省を示す。

それから、彼女の表情はパツと切り替わりいつもの表情となった。すると、彼女から

「・・・で？ ステイタス更新、一応しとくか？」

との彼女の問いに「はい、お願いします」と答える。

「ほな、こつち座りーな」とイスに促され、それにストンと座る。

そして、白衣の重ね合わさっている部分から開く様にしてロキに背中を晒す。何やらロキが、「なんか・・・やらしーな」とよくわからぬいことを言っていたが、気にしない。

「そんじゃ、はじめるで」

その発言の後にロキの指が背中に触れる、濡れたように感じたのは彼女の血であろう。

何度も経験しているのだが、この際のくすぐったさは余りなれることが出来ず、少し声をこぼしてしまう。

その反応に毎度のこと「ええなあゝ」なんてロキは反応するものだから、きつと面白がっている。

少しの時間が経過すると「おわたたで」とステイタスの書かれた紙をロキから受け取る。

――

紫苑

『Lv5』

力	：S	9	9	9	↓S	9	9	9
耐久	：A	8	9	2	↓S	9	0	2
器用	：S	9	9	9	↓S	9	9	9
俊敏	：S	9	8	2	↓S	9	9	1
魔力	：S	9	9	9	↓S	9	9	9

狩人：H

魔防：G

剣士：G

破碎：I

《魔法》

【氷華散乱】

・ 攻撃魔法

【蜃欺朧】

《スキル》

【理想贖望】

・ 獲得する経験値量の増加

・ ■■の丈によって上昇

【精神血染】

【原点回帰】

――

渡されたステイタスを見てみると、

「なあ、紫苑たん。まだランクアップしなくてええんか？」

「・・・はい。 まだ・・・もう少し待ってもらえませんか？」

私は既にランクアップが可能状態になって約半年が経過している

・・・

ランクアップをしない理由というのは――

私の『理想』を実現するためにあたり、ランクアップをしてしまうと少し障害に成ってしまう可能性があるためである。

この、ランクアップできることを知っているのは、ロキ、団長、リヴェリアさん、ガレスさんの四人のみである。

ロキは私の考えを尊重してくれて許可してくれた。

団長らも理由を話したら納得してもらえた。

しかし、保留にし始めてもう半年であるからにもうそろそろランクアップして貰いたいのが彼らの心情だと思う。

でも、まだ私の不安要素は残ったままであるため、未だする予定は無い。

ステイタスの確認が済み、ロキを見ると何やら嘗め回すように私を見ている。そこで未だ上半身裸であったことに気づき、白衣に袖を通す。

身なりを整え終わったところでロキを少しだけ睨みつけ声荒げに「ありがとうー(´▽`;)ございました!!」といってロキの部屋を後にする。

ロキの部屋を出た後は団長とリヴェリアさんにも報告を行った。

一通りやることは終わった。

現在の時刻は10時、特にこれからの予定もないし、退院したとはいえ気分の良い状態でもなかったため仮眠をとることにした。

――

目を覚ますとお昼時であるのだろう、食堂の方向が騒がしかった。私もおなかがついていたため、食堂へ向かった。

食堂へ着くと思っていた以上に団員達がいて何処に座ろうかと思渡していたところ、リヴェリアさんの隣が丁度空いていたため横へと座った。

先ほど退院の報告に行つた時に少し話を済ませていた為これといった話すこともなかったのだが、アイズやレフィーヤ達を見かけていないことに気が付いて、彼女に聞いてみたところ、彼女たちは町へ出かけたのだそう。

食事を終え私たちはそれぞれの部屋へ戻った。

―自室―

(町ですか・・・最近「アレ」もやれていませんでしたし、出てみましようか)

五話 普段はPCからの投稿だが、今日はスマホで投稿してみた・・・ちや、ちやんと投稿出来るよね？

「ま、待ってください！ こんなみだらな服をアイズさんに着せるなんて・・・私が許しません!!」

私達は今、町へ買い物に来ている。

何故だか酒場の後から元気の無いアイズさんを元気づけようと悩んでいた所、テイオナさんの案によりアイズを誘い、買い物をする事となった。

買い物に来たはいいが、連れてこられたのはテイオネさん、テイオナさん行きつけの服屋であり。アマゾネスの好む服装である、露出が多い服が並んでいた。

その様な服をアイズさんに着せるわけにもいかなかったため、慌てながらテイオネさんがアイズさんにおすすめしている紐の様な服を奪い取る。

そんな私を見て、テイオナさんが「こんな服を着たアイズも見てみたく無い？」と言われ想像してしまう。

「レフイーヤどう・・・かな?」

アイズさんはクルツと回転して私の方に体を向ける。回転したこ

とによって髪と、腰に巻いた布がフアサとたなびく・・・
あんなにハレンチな服だったのに彼女が着ると上品さを感じてしま

まう。
(とても綺麗・・・)

「レフイーヤ？」

「んひゃあああああ!？」

脳内で彼女の姿を想像していた所テイオナさんに声をかけられて驚いてしまった。その反応に「考えてたでしょ？」と聞かれ動揺気味にも否定の言葉を叫ぶ。

ここにもアイズさんに着せる事のできる服が無いことを悟り、アイズさんの腕を引きながら足早に店から出る。

「アイズさん、エルフの店に行きましょう！不詳ながらこの私が精一杯見繕います!!」

――

「ここです!!」

店に入ると私の見慣れた貴族風の上品な服が並べられている。

ここならばアイズさんに合った清く美しく慎み深い服が見つかるだろう。

私はアイズさんに似合う服を店の中からあれこれと悩みながら、彼女を着せ替え人形の様にしてしまう。どれも彼女には似合ってしまったためどれがいいのか選べなくなってしまうていた。

しばらく時間が経過すると

「レフイーヤ？ アイズも動きやすい方がいいんじゃない？」

「でもこの店の女性向け服って、みんなロングスカートかフリル付きだしさ、だったらいつそ紳士服にしちゃえばいいんじゃない？」

私が決めかねていると、テイオナさんが紳士服なら、と提案してく

る。

その提案に「アイズさんに男装なんて・・・!!」と反応してしまう
・・・が、

(・・・ん!?・・・男装・・・のアイズさん・・・!?)

また私は彼女の姿を想像してしまう。

男装であるが、彼女の美しい曲線が感じられる。それでいて普段よりも凛々しさが際立っている。

その彼女が私に横目で視線を送る。彼女の横顔とその視線に心を打ち抜かれる錯覚を感じてしまう・・・

(す、素敵ですアイズさん・・・)

「レフイーヤ?」

「まきやひあああああ!!」

またもテイオナさんの呼びかけに奇声を吐いてしまったため、羞恥で顔を赤くしながらそこにうずくまってしまう・・・

「あれ?・・・アイズが見当たらない・・・ついさっきまでそこにいたのに」

テイオナさんの言葉に顔を上げた。

周りを見るとアイズさんはおらず、またテイオネさんの姿もなかった。店の中にはいなかったため、2人で外に出たのかと考えたため、彼女等を探すため私たちも店の外へと出る。

店の通りを進んでいくとすぐに2人が見つかった。何か2人で話していたみたいだ。

2人が無事見つかったので安堵の心情である・・・

「みんな・・・私そこのお店に行きたい！」

と、アイズさんが少し頬の色を赤くしながら横の店を指で示しながら言った。

「・・・へ、変じゃ無い？」

試着室のカーテンが開かれ、顔を逸らしながらもこちらに視線を向けて私たちに聞いてくる。

彼女の着ていた服は白を基調としていて、箇所には黄色が入れられたもの。それに青のスカートである。

この服は、アイズさんの髪色に映えるように感じられて、彼女の美しさをより際立たせていた。

みんなが彼女に似合っていると伝えたところ、「・・・ありがとう」と照れながら答えた。

その服を購入し、私たちはホームに戻る前にもう少し町を見て回ることにした。

――

「ねえ、あれって紫苑じゃない？」

「え！ どこですか!？」

ティオネさんの発言に私は驚いたまま、紫苑さんがどこにいるかと辺りを見渡す。

すると屋台でなにやら食べ物を買っていた。

彼女は遠征で気を失ってから、『ディアンケヒト・ファミリア』で療養していたはずであったため、(もう大丈夫なのか)という心配と同時に普通に過ごせているようなので、その様子に安堵した。

先日『ディアンケヒト・ファミリア』を訪れた時にアミッドさんに彼女の様子を聞いたのだが未だ目を覚ましていない様だったので不安だったからである。

彼女の元気になった姿を見て嬉しくあったのだが・・・私はそれと、彼女の『アレ』に嫌厭を覚える・・・

私は彼女のことは好きなのだが、「嫌い」な所がある・・・それが『アレ』である。

彼女がホームの外に出る時に身につけるものがある。市女笠と呼ばれた被りものである。

どうして身につけているのかと聞かれれば、彼女の種族が関係している。

『鬼人』・・・それがもし町を歩けば周りの人々から冷たい視線を受ける事は簡単に想像できる。

そのことを一番に理解しているのは彼女であるだろう。

しかし・・・今の彼女は、

「・・・紫苑、帽子被ってない・・・どうして？」

「・・・分かりません」

アイズさんの質問に声色を落としながら、そう答える。

ごく稀に見かける彼女が市女笠を着けない行動。

実際、私にもその行動の意図を知らない。しかし、この行動を見て思う事がある。

「おい、アレ見てみろよ……」「なんだよ……おいおいアレ『鬼人』か？」

「また出てきたよ……」

「そろそろオラリオから出て行つて欲しいんだけど……」

「笑つて……気持ち悪い……」

「マジで目障りだわ……」

「本当に人殺してんの？」「おい、声大きいぞ……聞こえたら殺られつかもだぞ」

「あんな種族生きてる価値ねーだろ」

「あぁ、気分わり〜」

耳を傾けなくても入ってくる、彼女に対しての発言……

その様なものに対して私が耐えられるわけがない……

しかし、そんな周りの反応は常識と言つても過言ではない。

そう思つてしまうほどに、この世界で浸透されたものであるから。

私は私が嫌いだ……

ここで紫苑さんを周囲の者から庇おうと、声を出そうとしても……
息が詰まり喉に蓋がされたように「つつ……あ」などと言つた声にすらならない物しか出せない。

声が出ないのならば、彼女の手を取つて人のいない場所やホームに連れて行けばいい。しかし、その一歩すら出ない。

こうなってしまう度に、私にとって紫苑さんはそれほどの人でしかなく。彼女のことを『鬼人』として見ているのだと思ってしまう・

実際そうなのだろう。現にこの状況自体が証明してしまっている。

「う……っあ……っつあ……」

(声、出てよ……なんで？ 嫌だあ…… 私は違う、違う。違うんですよ。紫苑さんのことを……もう、どうしてえ……) 胸が苦しい、気持ち悪い、目が熱くなる、涙が出る、足に力が入らず崩れる。

の……最後に視界に映ったのは……周囲に晒す……彼女の

『笑顔』

――

「うん……っ?」

「あ……気分は大丈夫?」

目を覚ますと、目の前には彼女の顔……そして普段よりも近くに感じる声……頭に当る柔らかく温かいもの……

未だ周り切らない頭がだんだんと回転数を増やして行く、そして気づく。

(ひ……膝枕!?)

そのことに驚愕し、飛びあがろうとするもの「いきなり動いたらだめ」と彼女に肩を抑えられ、また膝枕に頭を預けさせられた。

冷静になり始めたが、熱い顔のまま彼女に「……ど、どうしてひ、膝枕……を？」と聞く、

「リヴェリアさんに膝枕してあげれば喜ぶし、お礼になるって言われたから……どう?」

理由はよくわからないが……とても良い、幸せである。

「はい、嬉しいです……」恥ずかしくて彼女の顔を直視できないため首を反対に傾けて、そう答える。

「そっか、なら良かった」

……きつと彼女は微笑んでいるだろう。

この幸せな時であったために薄れかけていたが、はつきりと残っている胸の苦しさ……そして、最後に映った彼女のあの『笑顔』何重にも貼ってつけた様な崩れない表情。

確実に貴女には周囲の声が聞こえていましたよね?

貴方は苦しく無かったのですか?

なんであんな事やり続けているんですか?

貴方は何がしたいんですか?

……やめちゃえばいいのに、どうして

――

「あ! リヴェリアさん!」

「ん？ 紫苑か、」

レフィーヤと暫く話した後、医務室から出た。

自室に戻ろうと廊下を歩いていると彼女が見えたため、レフィーヤが喜んでくれたことを伝えようと、声をかけた・・・

「・・・そうか、ならよかったな」

「はい、ありがとうございます」

レフィーヤとこのことを伝えて、彼女の案で良い結果が得られたため、そのお礼を伝える。

先程まで彼女の表情は優しいものであったのだが、少し曇った表情と変わっていった。

彼女のその変化から言われるであろうことに予想はつく。

「また、笠を被らず外へ出たな？」

「・・・」

「はあ、」と、私の沈黙にため息を吐く。

彼女には私のその行動の意図は伝えてある、と言うか吐かされた。

最初に彼女に見られてしまった時は「笠を忘れてしまったのか？」と私を心配するようであったが、何回もその行動を繰り返していることに彼女も、わざと行なっている事に気づき、詰問してきた。

(こわかった)

行動の意図を伝えたとしても彼女は納得はしていない様子であったが、私は止めるつもりは無いとはっきりと伝えた。

そんな私の意思の強さに彼女は折れてくれた。

それでも思うところはあつたのだろう。

「さつきアイズ達にお前が町で周りの者達に陰口を浴びさせられていたことを報告された。・・・あまり、彼女達に心配をかけさせないで

くれ」

「・・・すみません」

私自身、周りに迷惑をかけたくは無いため彼女等の心配に申し訳なさを覚える。しかし、これも『理想』を叶えるためには必要なことであるため、止めれることでも無い。

彼女との会話を終えた後、自室へと戻った。

六話 私はやってみよう精神のある nice guy
y なんだぜ!?!たぶん

「ロキ・ファミリア」は、比較的大規模な組織であるために団員が多く騒がしくしているのがほとんどである。

しかし朝食をとった後からやけにホームが静かになっていた。

それもそうだろう。今日は怪物祭と、呼ばれる。オラリオの祭りであるからだ。

朝食時にレフイーヤから一緒に行きませんかと誘われたが断った。

もし、私の種族に気づいた者が出てきてしまえば騒ぎになってしまうかも知れないし、せつかくの祭りを台無しにしてもらいたく無いためである。

そんな理由を言ってしまうえばレフイーヤはきっと気まずそうにしてしまうので、「少し用事があった」と誤魔化しておいた。

すると、「・・・そ、そうですか・・・」と残念そうに下を向いてしまっていた。

静かになったホームで特にやる事もなかった私は書庫に向かうこととした。

一人で落ち着く事のできる読書は私の数少ない趣味となっている。幼い時から物を考えることが苦手であった為、他のことを忘れて没頭できる物語といった書物を好んで読んでいる。

確か・・・文字が読める様になって初めて読んだのは――

「鬼退治」

変哲もないただの英雄譚。

私も特に思うこともなかった。悪が正義に倒される、ありふれた物語……

良くは覚えていないが、誰かに「『鬼』が退治されてしまつて貴方は悲しくなつてしまわないの？」なんて聞かれた記憶がある。

そんな問いに（そんなの悲しくなるはずないでしょ）と当然のように思った。

私が『鬼』に関わる種族だから「退治されてしまう『鬼』がかわいそう」だとかそんなものは浮かばない。

なぜならば、誰がどの様に見ても『鬼』が犯した行為は罰を下されるべき事なのだから。

そして……『私』と『彼ら』も別なのだ。たとえ同じ『種族』であろうとも『同類』などでは決してない。

そうだ……そうなのだ。

それなのに分かつてもらえない……

それでも、私は諦めない。『彼等』の為に……

「……んっ？」

——

「うわー 本当に出番なさそー」

「餌を用意されておいて、そのままお預けを食らつた気分ね」

私たちは怪物祭の闘技場付近にいた所、何やら騒がしい【ガネー

シャ・ファミアリア」の団員達を見て、何かあったのかと気になり、ちよ
うど人の集まっていた場所に行ってみると私達の主神がその中心に
いた。

彼女に事情を聞いてみると怪物祭で調教するためのモンスターが
脱走してしまったらしい。

想定していた事態よりも大きな物であった為驚いてしまった。

しかし、既にアイズさんが動いてくれているみたいで、脱走したモ
ンスターも一部除いて比較的弱い部類だったようだ。

現在はアイズさんがモンスターを討伐している様子を見ている所
である。

アマゾネス姉妹は武器を所持していないのにも関わらず戦闘に参
加したそうにしている。

アイズさんの無駄のない戦闘にこの騒動も直ぐに収まりが着くだ
ろうと確信していた時であった。

「……？ 地面に揺れてない？」

「……本当 ですね……」

テイオナさんがいった通り地面が揺れ始めたのだが、これは地震と
いったものではない事が理解できる。

この揺れに警戒を始めた所……

少し離れた位置から大きな土煙りを立てて爆音が大気を揺らした。

その位置に視線を送ると見た事のないモンスターが出現していた。

あんなモンスターを「ガネーシャ・ファミリア」はどこから捕獲し
てきたのかと驚愕するが、街中に出現したソレが人に被害を与える前
に！と駆ける。

住民に迫る巨大な触手の様なもの、大きさに似合わず俊敏な動きのソレ。

恩恵の持たない一般人にそれを回避する能力など持ち合わせている事などあるはずもなく、立ち尽くすようにソレの攻撃を受ける…殺される、その直前。

轟音と共にソレが地面へと叩きつけられ、へしゃげる。それを放つたであろう二人がソレと距離を取る為に後ろへ飛ぶ。

間合いをとる事のできた二人はソレにぶつけた拳を反対の手で押さえ、

「っー、かったーあ!？」

「っ!？」

ソレが想定していた以上に頑丈であったのだろう、二人はその痛みに耐えている。

打撃は効かないと判断し、各々の武器を持つてくれれば良かったと後悔しているも、モンスターに慈悲など存在するはずもなくソレは彼女達を目掛けて攻撃を仕掛けてくる。

ソレの攻撃に危なげなく対処しているものの、有効な攻撃手段を持ち得ていない為、体力が続くまでの問題であろう。

しかし、この場には魔導士であるレフイーヤがいる。二人によって引きつけられている間にと、彼女は詠唱を始めた。速度を重視した短文詠唱である。

詠唱が済み、ソレに狙いを定めた…その瞬間…

「っぐっっ!？」

何も無いはずであった彼女の地面から触手によく似た何か彼女の腹を貫き潰す。

その攻撃により彼女は放物線を描く様に飛ばされて地面に叩き付けられ、意識を手放した…

その時であった。ソレが痙攣を起こす様に短く揺れた。同時にソレの先が割れるように開き出す・・・現れたのは花のようで真ん中には凶悪な口があった。

ソレは気を失ったレフイーヤに迫り始める。

その様子を見てティオネとティオナが彼女に向かって行こうとするも次々と襲ってくる触手に阻まれてしまう。

目を開く、視界が歪む。意識が確かになり始めて感じる腹部の激痛・・・

「あああああつづあああ」

(・・・嫌だ・・・嫌だ嫌だ)

迫ってくるのは私を食すつもりなのだろうか大きく開けた口・・・それから逃げる為に身体を起こそうとしても動いてくれない脚。激痛により思考が鈍る。身体が燃えるよに熱くなり始める。

「あつああああああああああああああああ」

(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ)

恐怖から叫ぶのか、痛みを和らげるために叫ぶのか・・・きつと両方だろう。叫ぶたびに麻薬のように思考を鈍らせてくれる。

・・・すぐそこにソレの口がある。

「ああああああああああ」

(・・・もう嫌だ!!)

・・・食われる、そう思った。

・・・その瞬間に視界を通り過ぎたのは、弧を描く一閃
見覚えのあるその美しさ・・・

「あ・・・」

(同じ また同じ。 きつと・・・きつと、また私は・・・)

(また私は貴方に助けらる・・・)

(・・・私は・・・貴方を・・・)

(・・・助けなくせに)

(・・・よかった、間に合った。怪我してるみたいだけど・・・)
私は書庫で読書をしていた所、何か胸騒ぎがしてしまい。ソワソワ
して読書どころで無くなってしまった為に、しっかりと笠を被って町

へ脚を運んだところ・・・騒がしい音が聞こえ、その場所へと駆けた。その場所に近づくと、レフイーヤが謎のモンスターに襲われる目前であり・・・

それで、今のこの状況というものである。

レフイーヤが無事である事を確認しても怪我をしている事に変わり無いため、ポーシオンを渡そうと彼女に近寄ろうとする。

足を一歩進ませた時にだ・・・地面が大きく揺れ、振り返ると先程のモンスターが三体地面から出現する。

驚きはするが冷静に一番近いソレの首を確認し、その方向へと左足で地面を蹴り、飛ぶ・・・その瞬間に見えるのは目標であるソレの首・・・問題なく斬り捨てる。

切り捨てた屍を蹴り、方向展開を行おうとした時であった。

突然、視界が歪んでしまう・・・脚に力が入らずにそのまま下に落ちる・・・

着地には成功したものの、まだ足が上手く制御出来ていなかった。私の思っていた以上に十分に回復が出来ていなかったようだ。

そんな事を考えていても状況は変わらない。すぐにソレの触手による攻撃が飛んできた為、刀で軌道を逸らすも勢い殺しきれずに数メートル飛ばされてしまう。

未だ脚が使え無いため、脚での着地が出来ずに転がりまわってしまった。

少し厳しい状況だと思い、魔法を使用しようかと考えていたところ、

ソレの標的が私から別の者に切り替わる。

ソレの視線の先を見るとレフイーヤであった・・・

「大丈夫ですか!？」

「うっ！・・・あつ・・・は！・・・げほっ」

私は再び意識を覚醒させた。二回目の気絶の前に見た彼女の動向が気になり、未だ激しく打ち付ける痛みを押し殺し彼女の姿を探す。彼女は現在、ソレの攻撃により吹き飛ばされていた・・・その彼女を見て焦り、勢いで立ち上がる。

いきなり立ち上がった私を見て、「待って下さい！」「ガネーシャ・ファミリア」の救援がもうすぐきますから！彼等に任せましょう！！」と慌てた様子で私に声を掛けてきていた女性がそう伝えてくる。私の怪我を配慮してのことだろう。

立ち上がってしまった事により腹部の激痛がより増す。その痛み
に膝を折る。

そして、込み上げるのは

（「ガネーシャ・ファミリア」ならば彼女を助け出せる・・・私がいなくても・・・私がいなければ・・・）

（・・・また、また彼女に助けられたまま・・・私は何もしないの？）
（そんなの！嫌だ!!）

「私は・・・レフィーヤ・ウイリデイス　ウイーシエの森のエルフ」

「神ロキと契りを交わした」

「このオラリオで最も強く誇り高い偉大な眷属の一員!!」

私は飛び出す。

（仲間を友を・・・『大切な人』をおいて・・・逃げ出すわけにはいけない）

詠唱を行うため、肺に空気を送り込む。それすらも痛みは激しくなる。

それに涙を浮かべる。だが、それを無視して言葉えいしやうを紡ぐ。

ソレは魔力に反応する様で、私に標的を変えて襲いにかかる。

（恐れはない　みんながいる）

迫る二体をアマゾネス姉妹がそれぞれ地面へと叩き落とす。奥に視線を送ると紫苑さんは無事な様で自力で立ち上がっていた。

そんな様子に安堵を感じながらも詠唱をさらに続ける。

サモン・バースト
【召喚魔法】

エルフ 同族の魔法。詠唱及び効果の完全把握。二つ分の詠唱時間とマインドの消費。

これらを条件にあらゆる魔法を行使できる……前代未聞の反則技。レアマジック

召喚するのは……エルフの王女 リヴェリア・リヨス・アールヴの攻撃魔法。

(……紫苑さん 私は貴方を 救いたい)

「ウイン・フィンブルヴェトル!!」

一瞬にして周囲を包む純白の光彩は時間すらも凍らせた。

その光彩を直に受けたソレは体すべてを氷に埋め、微動だにしない。

レファイーヤの作った最大のチャンスを逃す二人でなく、即座にソレに向けて脳天から踵を撃ち貫く……

ヒビが入ったと見えたその後、ソレの体に一瞬で広がり粉碎される。

綺麗にも見えてしまう氷が弾ける光景。

「レファイーヤありがとうー!」

「ほんと助かったー!」

ソレを粉碎した二人はレファイーヤに向けてお礼の言葉と共に彼女に抱きつく。

そんな光景を見ていた紫苑も彼女達の元に近づき、

「ありがとうレフィーヤちゃん、助かったよ」

紫苑にお礼を伝えられた彼女はその言葉に喜びを覚える。そして紫苑に何か伝えようとテイオナに倒されていた身体をよろけながらも立ち上がらせた。

「紫苑さん・・・私は・・・」

(・・・貴方を救いたい)

「紫苑さん、今度町へ出る時・・・私と一緒に行ってくれませんか」

そんな、何の変哲もないお願い・・・

そのお願いに、問われた本人は表情を変えないまま、少しだけ停止してから・・・「うん、分かりました。今度行きましようね」といつもの声色で彼女に伝えた。

すると、和んでいた所に彼女達の主神が近づいて来た。

「ほいほいまだ仕事は残つとるでー」

レフィーヤはギルドの者に治療を施して貰う。姉妹は地下に行つて先程の新種のモンスターがいなかったかの確認・・・などそれぞれに今後の方針を伝えた。

「・・・紫苑さんは・・・部屋に戻つて、休む!!」

「・・・はい」

怒られる様に言われた彼女はしゅんとしていた。

七話 戦闘描写ってやっぱり難しいもんなんですね！
ズバーン！シャキーン！ドーン！

「ー」

私の右眼を狙うように向けられた彼女の剣先に自然と意識が向いてしまう、互いに動かずに数分が経過していた。

向けられた刀の緊張感から精神が加速度的にすり減っていく．．．額に浮かぶ汗は流れていき、顎を伝って落ちていく。先ほどから一歩も動いていないのだが息は少し上がり始め、いつもなら感じない身体の重みすらも覚え始めていた。

対して私に刀を向けている本人は対峙し始めた時と変わらないように見える。

現に私の構えているデスペレートは小刻みに揺れてしまっているが、突きつけられた剣先は揺れる事なく、まるで絵のようにそこに静止続けている。

全く動かないそれは、より緊張を与えてくる。

．．．私の戦闘スタイルはスピードを重視しての斬撃である。

ならば直ぐにでも彼女に向かって斬り込めば良いのでは、と思ってしまうだろうか．．．

この状態でもし動こうものなら私は．．．斬られる。

そう確信してしまうほどに、対峙する彼女から隙が無い。

そんな彼女に勝つ方法は可能性は薄いのだが．．．例えば息を吸ったその瞬間だろうか？人というのはその瞬間は反応が遅れる為である。

しかし、狙えても一度だけだろう。彼女のその瞬間を何度も狙えるほどに体力は集中力は残っていないからだ。

そんな作戦が構築された為、意識を彼女の呼吸に集中させる・・・
駄目だ・・・全く視えない。感じ取れない。ここまでわからないと、
呼吸しているのかと思えてしまうほどだ。

またもや八方塞がりとなってしまう、思考を広げていた時であつた・・・

彼女が構えを変えた・・・

右眼に向けられていた剣先は、一度中心に戻った後、上に弧を描くように彼女の元へと流れていく・・・

次に彼女の取った構えは刀を頭の上へ置くようなものであつた。腕を上げると同時に後ろにあつた左足を前へと送った。そして先ほどまで私に向けられていた剣先は天に斜めに向けられていた。

構えを変えて少しの間があつた・・・

スウーと彼女の左足が私に向かって無音のままに進んでくる・・・
私は彼女が仕掛けて来た！と思い、警戒のため身体に力を入れた。
彼女はゆっくりと左足のみを進ませていただけだった為、刀を当てる距離には間合いが遠すぎるものであつた。

それに、斬り込んでくれば返すことが出来ずとも余裕を持って回避できる距離であつた。

そう考慮して彼女の動きを見ていた。

「!? ーっ!!」

いきなり目の前に彼女が現れた。

同時に刀が振り下ろされる。寸前にデスペレートで受けたが、勢いを殺すことができずに右方向後ろへと飛ばされる。

飛ばされるも体勢を立て直して、脚での着地に成功する。

・・・いきなり目の前に出現した。

彼女は瞬間で指定の位置に移動できるスキルや魔法など持っていない・・・そう見えただけなのだ。

普通、人が動くときには必ず身体の一部が動いてしまう。それが相手に見られてしまい、防がれる。これが普通なのだ。

目視出来ないほどに動けばと思うだろうが、それは加速が済んでいればの話である。停止状態では不可能に近い。

確かに、先程の彼女は完全な停止状態では無かった。それでも、私に見えた彼女の姿は頭、肩、胸、腰、視界に捉えていた殆どが一切動かずに向かって来た。そして、動いていないと脳に錯覚を起こさせ
て・・・一瞬で目の前に現れる。

といった仕組みであろう。

それでも動いてしまう箇所があり、それでは脳に錯覚を起こすことができない。

それは・・・脚だ。

脚を使わなければ動くことは出来ない。

しかし、それを彼女は解決させた・・・

斬り込む前に動かしていた左足によって・・・

左足は最後までゆっくりと進んでいた。その動きに注意を向けさせる事で、右脚の蹴りを認識させないようにする。

これらによって・・・目の前に瞬間的に現れた。といった事だろう。

その絶大な技術に驚愕してしまうが、防ぐことは出来た。

再び構えられてしまえば、次はないかもしれない。そう考え、彼女の方向へと低い姿勢で駆ける。

視線の先には剣先を下に向けた彼女がいる。その彼女の脚と刀ごと斬り抜こうと横薙ぎで剣を振るう。しかし私の剣は、彼女の刀によつて下から擦り上げられてしまう。同時に彼女の美しい白い脚が私の顎を狙って蹴り上げる。それを左手で防ぐも頭への衝撃は抑えきれずに揺らされ、天を仰ぐように飛ばされる。

頭を揺らされてしまった為、視界が歪んでしまっていた。

少しよろけるようにしてしまった私を逃す彼女ではなく、間合いを

瞬時に詰めてくる。

流れる様に次々と襲いかかる斬撃を後退しながらも凌ぎ続ける。右から斬り払ったのならば刃の方向を180度回転させて左から斬り払うなど、攻撃の合間が全く無い。

そんな反撃を与えない斬撃により私の心は焦りに埋め尽くされる。そんな時であった・・・

彼女の斬撃がピタッと止まり、その刀の剣先は私の右眼に置かれていた。

畏だ・・・そう思った。

しかし、焦っていた私は「隙」だと勘違いしてしまった。

でも遅い・・・既に動いてしまっていたから。

剣を彼女に向かって右斜め上から振り下ろす。

すると・・・彼女の刀は私の剣を棟の反りで撫でるように下に流し、その動きと連動するように右足を斜め右方向に進める。

剣を逸らされた私は吸い込まれるように体勢を崩してしまう。

剣を刀の反りで流されたために、刃は私に向けられている。

彼女の腰の位置にある刀は、そのまま斬り上げられる。

刃は私の首を斬り飛ばす・・・

瞬間に止められる。

喉に冷たいものが触れたように感じるが痛みはない。その、感じた冷たさに背中が凍りついてしまい、ペタンとお尻を着いてしまった。

少しの間放心状態であった私に向けて白く冷たそうな手が差し伸べられた・・・

顔を確認しなくても、先ほど対峙していた相手・・・「紫苑」の手だ

ろう。

彼女の手を取り立ち上がらせて貰う。その後、

「大丈夫でしたか？少し真面目にし過ぎてしまいましたね」

「ううん、頼んだのは私だから・・・ありがとう」

彼女は反省している様に肩を落として言った。そんな彼女に大丈夫なことと、お礼を言った。

・・・完敗であった。

そもそも最初の状態で続けていれば、私の集中力が切れてその瞬間に斬り捨てれば彼女の勝ちであった。

しかし、それでは私の訓練にならないだろうと判断したのだろう。構えを変えての彼女からの攻撃、それは紙一重であったが回避することができた。

だが問題は、その後の展開だ・・・

彼女は反撃を与えないようにと攻撃し続けた。それによって私に焦りを与えるために・・・

そして彼女の策にハマり、焦り始めた私に向けてわざと隙を見せて釣られた私を斬る・・・

全て彼女の手のひらで転ばされていたに過ぎない。

与えられた慈悲すらも私にとっては高すぎる壁であった。

もちろん、彼女の策も相当に凄いものなのだ。しかし・・・それよりも心を奪われるのは、「技」である。

剣技もそうだが、視線の送り方、視線の誘導、私に認識させなかった息遣い、強靱すぎる集中力、身体の動かし方。などであろうか・・・

動作全てが一級品のよう感じてしまう。

それらによって彼女の戦闘は洗練されていく・・・

私とは違った戦闘スタイルではあるが得るべきものは確実にあるだろう。

模擬戦をお願いする度にこのように負けてしまうが、課題が見えてきてとても有意義なものとなっている。

しかし、教えて貰おうとしても・・・感覚で行っているとのことで伝え方が良く分からないらしく、指導してもらったことはない。

であるから、「模擬戦」ということだ。

「紫苑・・・身体は本当に大丈夫、なの？」

「問題ないですよ？丸一日休息を取りましたから」

一昨日、町中で出現したモンスターを討伐していた紫苑だったが、体調が回復しきれていなかったようで戦闘中に危ない場面があったらしい。

いつも安定した戦闘をこなしている彼女であった為に驚いたが、大事に至らなかったようなので安堵した。

だが、彼女はロキから休息を取るようになられたらしく昨日は部屋でじっとしていたらしい・・・

私は昨日、デスペレートが帰って来たので慣らすために朝からファミリアの広場で剣を振っていた。

その時に紫苑が来た。

彼女も感覚を確かめたいらしく刀を持って来ていた。もう体調は大丈夫なのかと聞いた所、問題はないようであったため、ダメ元で模擬戦をお願いしたのだが笑顔を浮かべながら了承してくれた。

それで・・・現在、ということである。

私は模擬戦の後、素振りを始める彼女を眺めていた。

そんな彼女等の模擬戦を見ていたものが一人・・・

「紫苑さん、アイズさん・・・す、すごかったです!」

二人に向けてエルフの少女が照れと興奮染みたように賞賛の言葉を伝えて近くに寄る。

その言葉に「レフィーヤちゃん! うん、ありがと」「えつと・・・ありがとう」と彼女に答える。

暫く、彼女達は話し込んでいたのだが・・・

「レフィーヤ、本を取ってくるのにどれだけ時間がかかっているんだ?」

と、レフィーヤの後ろからリヴェリアが話しかける。

その声に驚いて跳ね上がるレフィーヤはリヴェリアに捕まり引きずられていく・・・

レフィーヤを引きずる彼女は紫苑に向かって「今日の指導は私だが一緒どうだ?朝食までだが?」と聞く・・・その彼女の問いに「分かりました!」と続いていく。

紫苑が一緒ということが嬉しいのかレフィーヤは「本当ですか!?!」とテンションが上がっていた。

テイオナは一緒に朝食を取っていたアイズに声を掛ける・・・

「アイズ、今日は何かする予定あるの？」

「実は・・・」

昨日、デスペレートを取りに「ゴブニュ・ファミリア」を訪れた時に壊してしまった借りた剣と一緒に持っていったのだが弁償として4000万ヴァリスを支払いして貰うとのことであった。

しかも、元々のデスペレートの修理費もあることによりお金が必要となっていた。

「一週間はダンジョンにこもってお金稼がなきゃいけない」

「なんだ、じゃあ私もいくよ」

テイオナも主用武器の製作による費用を稼ぐ必要があるらしくアイズに同行の意思を伝えた。彼女の発言にアイズは了承する。

そんな二人にアイズの隣を陣取っていたレフィーヤも「わ、私もお邪魔でなければ！」と慌てながら参加を伝える。

「テイオナー、フィンも誘ってみようかなーって思ってるんだけど

「行くわ！」・・・うん」

テイオナが姉に参加を聞こうとすると被せ気味に答えた。

彼女達は朝食を済ませた後、フィンの執務室に向けて足を運ぶのであった。

「フィナー入るよー」

ノックもせず、テイオナが扉を開けて室内へ入る。中に入るとフィンとリヴェリア、隣に紫苑がそこにはいた。

紫苑がいたことに「紫苑さんいたんですね!」とレフィーヤが発する。

部屋に入ってきた者達に「ン……少し待ってくれ今一区切りつくから」と彼女等に伝える。

「よし……っと、それで僕に何の用だい?」

「実はですね、テイオナ達が暫く探索に出かけたいそうなんですけど。もし団長も良かったら……と」

テイオナを押し除けてテイオネがフィンの問いに返す。フィンが「ああ、いいよ」と言うのとガッツポーズをしながら目を輝かせるテイオネ。

そんな様子を横目に「せっかくだしリヴェリアと紫苑もどうかかな?」と二人にフィンが聞く。

リヴェリアは少し考えた様子を示すもの了承した。紫苑も笑顔を含めながら参加を伝える。

参加する者が決まったところで彼等に集合時間なりを指示する。

「それじゃあ、各自準備を行って正午にバベルに集合といこうか」

「「「おーー!!」」」

ー【ディアンケヒト・ファミリア】治療院ー

「いらっしやいませ」

「……アミッドさん、ハイポーション マジックポーション 高等回復薬と精神力回復薬を五個づつお願い出

来ますか？」

普段、あまり来たく無いのだが・・・リヴェリアさんに今回も世話になったのだからとお礼としても会ってくればいいのではないかと
言われると同時にお使いメモを渡されて、行かざるを得ない状況に
されてしまった。

それと、いくつかポーションなどを購入する予定であったテイオナ
とアイズと共に此処に来ていた。

アミッドさんにそれぞれ購入したい物を伝えると・・・それらが高
い位置にあるのか台座を使って手を伸ばすも、届いていない。背伸び
をしてギリギリであろうか・・・

そんなプルプルとした彼女を見て、(少し危ないな)と思ってしまう
ため彼女の隣に行き、手の先にあつた箱を代わりに取る。

指先に触れていた箱が取り上げられて、「あつ」と声をあげるアミツ
ドさん。箱の行方を目で追うと私であることに気がつき、「あ、ありが
とうございます」と俯きながらにお礼を言われたので「いえ、大丈夫
ですよ」と伝える。

未だ俯く彼女の頭がそこにあつたため、無意識に撫でてしまった。
そのことに(はっ!)と気付くものの、アミッドさんは嫌がった様子
ではなかったので少しの間撫で回していた。

(・・・うん、かわいい)

そろそろ良いかな。と手を離すと上目遣いな彼女を見て、くるもの
があつたが気にしないことにする。

購入すべきものは全て揃つたため、治療院を出ようとするがその前
に・・・

「アミッドさん、これからダンジョンの30階層程まで行く予定なの
ですが何か必要なものはありますか？」

「それでは・・・白樹の葉を数枚採取して頂けますか？」

お世話になっっているお礼にと彼女のお願いを聴くことにした。
彼女はそれを伝えた後、「・・・どうかご無事で」と正に聖女のような優しさを私達に感じさせた。

↓^{ダンジョン}地下迷宮入口 摩^バ天^ベ楼^ル施設 中^{セントラル}央^{パーク}広場↓

「・・・それじゃー!!しゅっぱーつ!!」

八話 リヴィラの街の回って書くのすつごーく難しいね？時間だいぶ掛かっちゃった！

ダンジョン
地下迷宮18階層 「迷宮の楽園」
アンダーリゾート

ダンジョンの中で冒険者達が初めて訪れる安全階層。モンスターの産まれない階層。

ここでは地下でありながら「空が存在する」天井を埋め尽くす青水晶軍。中心の巨大な白水晶が時間と共に光量を変化させ地上とは違ったサイクルで「朝」「昼」「夜」を作り出す。

そしてこの階層のもう一つの特徴……

それが上級冒険者達が経営するダンジョンの宿場町「リヴィラの街」である。

街の入口に設置されていた簡素な門には文字の書かれた旗のようなものが掲げられていた。

「あの……前々から気になっていたんですけど……門に書かれている334って数字つてもしかして……」

「ああ、334代目「リヴィラの街」って言うことだ。つまり過去に333回壊滅しては再築されている」

レフィーヤの疑問に答えるフィン。

そんな二人の後ろにいたリヴェリアが街を眺めていたのだが、何やら違和感を感じる……

「街の雰囲気は少々おかしい」

「そういえばいつもより人が少ないような・・・」

リヴェリアの発言にテイオナが同意を示す・・・

――

私達は人集りができていた場所に足を進めた。

そこにいた冒険者に話を聞いてみると、どうやら殺人があったらしい。殺人はさして珍しいものではないのだが、街中で行われたとなると気掛かりな点であった。

この街で宿を取る予定であった彼等も無関係では無いため、事件の早期解決のために協力する事とした・・・

事件現場の部屋に入ると・・・頭部が大きく欠損された亡骸が置かれていた。

死亡者の身元などは事件解決の有力な情報となるのだが、顔が判別できないほどに破壊されているため身元が分からない。

・・・そこで「リヴィラの街」を仕切っているLv3の「ボールス・エルダー」によつて「ステイタスシール解錠薬」が使用された事で、名前とファミリアが判明する・・・

「所属は【ガネーシャ・ファミリア】名はへハシャーナ・ドルリア<・・・」

ステイタスを記すのに使用されている【ヒエログリフ神聖文字を神以外で読解することのできる人は少ない。

エルフであり王族でもあるリヴェリアはその知識を所持していたため、屍に書かれたステイタスを読み上げる。

その彼女の発言にボールスは驚愕する・・・

「ハシャーナだど!? 冗談じゃねえぞ・・・【剛拳闘士^{ハシヤーナ}】つつつたらLv4じゃねえか!」

殺害されたのがLv4・・・その事実^に部屋にいた者達の表情が固まる。

オラリオの中でもLv4となると十分に実力をつけている冒険者である。その者が殺されたとなれば、それを行うことのできた犯人は相応に実力を有した者である・・・ということである。

しかも、部屋の状況であるが、争い合った痕跡が一切ない。殺されそうになった者、それもLv4であれば抵抗なしに殺されようとはしないだろう・・・しかし、抵抗をさせずに殺すことが出来たのであれば・・・

「・・・Lv5か、それ以上の能力^{ちから}の持ち主」

アイズが発した言葉に部屋の中に緊張が走る・・・

――

フィンは部屋の様子を観察して考察をする。

・ 乱れの少ないベッド。

・ 肌着を着ていたハシャーナから犯行は事の前である。

・ 狭い空間であるが調度品が綺麗なままであることから第三者の乱入ではない。

これらが挙げられた。

そして、ハシャーナと一緒に部屋にいたのは女性であること。宿屋の主人による情報である。

二人は昨日の夜に宿屋を貸し切ったそうである。主人は金をもらった後に宿を出てしまったためにこれ以上の情報は持っていないらしい。

「……犯人は第二級冒険者の首をへし折っている」

「首?……首の骨を折って殺してから頭を潰した?」

うつ伏せに倒れていたハシャーナの首は握って圧縮された様に潰れてしまっていた。その損傷具合からしても確実に致命傷であり部位を考えても恐らく即死であったと考えられる。

であれば、既に死んでいた彼の死屍に対して頭を潰したことになる。フィンはその行為に不自然に感じていた……

「何か目的があったのか……それとも、相当苛立っていたのか……」

フィンはベッドの横に落ちていた引き裂かれる様に開けられたリュクサックを調べ始めた。

中には保存食やポーションなど、冒険者らしい持ち物でしかなかった。中身を荒らされている事から犯人は彼の所持していた物に目的があったのだろうか……であれば

ハシャーナの所持していた物を奪うため、彼に色仕掛けを行い、油断したところを喉を潰して殺す。しかし目的の物が見つからず臍癢を起こして頭を潰した……といった事だろうか?

フィンは考察を広げながらリュクサックに入っていた血塗れの羊皮紙を取り出した。

冒険者依頼の依頼書と思われるしき紙は血によって大半の文字が読む事ができなかった。解読出来たのは

「【三十階層】【単独で】【採取】【内密に】……これらから予想できるのは」

「・・・ハシャーナさんは依頼を受けて犯人に狙われる『何か』を三十階層に取りに行っていた・・・と言う事ですか？」

紫苑はフィンの解読した依頼書と今までの情報を繋ぎ合わせた。フィンは「そういう事になるね」と彼女と同じ考察であることを伝えた。

少し沈黙が続いた後、

「ボールス、一度街を封鎖してくれ。リヴィラに残っている冒険者を
出さないでほしい」

――

「よおし女どもお!! 服を脱げーッ」

「おおーッ!!」

フィンの指示により、リヴィラの街を封鎖して冒険者を外に出さないようにした。まだ犯人は移動していないとのフィンの勘である。そして調査の間に判明した、犯人は女性であるということ・・・。であれば彼を襲ったのはその際の女である事が妥当な考えである。

この様な情報からリヴィラに滞在していた女性冒険者に対して身体検査と所持品検査などを行うこととなった。

男性達は何やら盛り上がっているが、女性相手に男性が検査を行うとなると協力してくれない可能性が高いため、リヴェリアの指示により【ロキ・ファミリア】の女性団員が検査官となった。

「それじゃあ、こっちに並ん・・・で?」

女性冒険者に向けて手を挙げて自分の前に並んで貰おうとするレ

ファイヤ。

しかし、自分の隣にいたフィンに向けて走り出す女性達・・・あつという間に彼が見えなくなるほどに囲まれてしまう。対してレファイヤの前には誰一人並んではいなかった。

そんな光景に唾然としてしまっていた。

「フィン早く調べて！」

「身体の隅々まで!!」

「私も!!」

「あの・・・アバズレども！　うがああああ!!」

フィンに群がる女性冒険者達に怒りを覚えてテイオネは蹴散らしに突っ込んで行った・・・

・・・響く轟音

「あれ？紫苑さんも誰も並んで貰えなかつたんですか？」

「え？・・・いや・・・うん、そうなんです」

レファイヤはテイオネの暴走によって検査どころではなくなつてしまったため、落ち着くまで待つ事にした。下がったところ、紫苑もそこで待っていたのだ。レファイヤは自分と同じ理由であろうかと思ひ質問するが、何やら彼女は動揺した様子を少し見せたが肯定した。

少し時間が経過したところにアイズも合流して、三人で騒動の光景を観戦していた・・・

そんな騒動の中、冒険者の集合地から少し離れたところに青ざめた表情をしている少女がアイズの瞳に映った。

暫く震えて立ち尽くしていたその少女は集合地から逃げる様に背を向けて走り出した。

アイズは明らかに不自然な様子を示す少女が何かを知っていると判断して追跡に向かう。

「……行こう」

「え!? あっ……は、はい!」

走り出すと同時に同行を伝えられたレフイーヤが慌てて走り出す……

(……私も行ったほうが良かったですかね?)

……

「なにモンスターへの侵入を許してやがる!? 見張は何やってんだ!!」

身体検査と荷物検査が終盤になっていた頃に突然、街に異色のモンスターが大量に出現した。

ティオネとティオナから怪物祭で戦闘を行った新種のモンスターと同じ個体である事が判明した。武器無しであったとはいえ彼女達が対処し切るのに時間がかかった相手であるから、リヴィラに滞在する殆どの冒険者では危険が及んでしまう。

実際に彼等の攻撃にはダメージは受けてない様子であった。

しかし、五人一組で小隊を作らせることで一匹であれば抑えられると判断しボールスに指示を送る。

彼等が抑えていたところで数が減るわけではないため、殆どの対処は僕たち（ロキ・ファミリア）が行うこととなった。

出現した食人花^{モンスター}は相当に数が多く、僕らだけでは被害を出さずに対応し切る事は難しい。

しかし、想定していた以上に被害は抑えられていた・・・

大量の食人花を対処しきっている、紫苑の働きによるものである。

姉妹の情報から、あのモンスターは魔力に引き付けられる事が分かっているため紫苑は魔力を帯びさせて故意的に引き寄せ、それらを両断する。といったことを繰り返している。

彼女の魔力容量は膨大であるために出現したモンスターを大規模に集めている。

彼女は魔法は使用せずに刀のみで自身を囲むモンスターを蹴散らしていく・・・止まることなく踊る様に滑らかに回り、両に持っていた得物によって何の抵抗もなくそれらを斬り裂いていく・・・

その戦闘の美しさにひき寄せられてしまいそうになるが自分の戦闘に集中し直す。

現状維持であれば問題ないだろう。彼女の働きにより対処は比較的楽に行えている。

しかし、自分の頭に不可解な点があった・・・

（・・・でき過ぎているな、この安全階層^{セーフティポイント}にモンスターは産まれない）
（つまり食人花^{これら}は他の階層から来て姿を隠しこの街を取り囲んだとい

うことになる)

(・・・あまりにも作為的すぎる)

未だ増え続ける食人花を対処しながらも思考を巡らせ続ける・・・
思考力を持つことないモンスターにしては偶然だとしても納得の
いかないほどの行動。

そして殺人が行われた後というタイミング。

無関係とは考えられない、それらを考慮して考察を広げる・・・
その中の一つ。

可能であるかは分からない・・・しかし一番に現実性が高いもの、

(殺人鬼は調教師か・・・!!)

――

視界に入るのは3匹・・・後頭部から感じる気配から後ろにも4匹
程度いるだろう。

まずは目の前の食人花を始末する・・・左足を蹴り込み、前へと飛
ぶ・・・

左手に持った大の刀を担ぎ、首を両断する。

両断した勢いのままに身体を回転させ、右方向から新たに襲いかか
る食人花を斬る・・・それを足場に使い、方向転換を行う。今度はしつ
かりと脚に力が入ってくれる様である。

実際、今日の身体の調子は良い。それに、普段通りに冷静に周りを
見る事ができている。

戦闘を開始してから短くない時間が経過していて、食人花の数は確

実に減っている。最初は刀を振れば何匹かを斬ってしまう程に囲まれていたのであるから相当数を始末したのだろう。

一時はリヴィラの街が壊滅してしまうのではないかと危惧していたのだが、被害は完全には防ぐことはできなかったものの、想定以上に抑えることはできたと思う。

引き付けていた最後の1匹の首を斬り上げて始末したところ・・・

(・・・!?)

嫌な違和感を感じた。

それが発せられている方向に視線を向ける・・・

また、今まで見たことのないモンスター。これも食人花と同じ様な雰囲気を持ったものであった・・・身体を起こしたソレは悲鳴にも聞こえる鳴き声を18階層を響かせる・・・

私は団長達が対処していた広場から少し離れたところで戦闘を行っていたのだが、ソレは広場に向けて進んでいく・・・

彼等がいるのであれば問題ないとは思うが、これだけイレギュラーが続いてしまっているので不安要素を無くすためにも広場へと向かった。

「団長さん！あのモンスターは!?!」

「!?! 紫苑か!」

広場に着いた私は指揮を取っていた団長の元へと直ぐに向かった。

状況としては新しく現れたモンスターに作戦もなく突撃したりヴィラの冒険者達が返り討ちされ、彼等を避難させるためにソレを

【ロキ・ファミリア】が抑えているらしい・・・

私もそれに協力しようと動いたところ・・・

「紫苑、待ってくれ・・・君にはアイズの所に行ってもらいたい」

団長の説明によるとアイズは何者かに襲われたらしい・・・彼女には怪我はなかったみたいだが、一緒に行動していたレフィーヤがその者に少しではあるが、ダメージを受けた。

それを聞いて、私が彼女達についていかなかったことに対して判断ミスであつたと悔しさを覚える・・・

アイズは負傷したレフィーヤを団長達の元に届けた後、すぐに襲撃者を対処すべく戻っていったらしい・・・

その襲撃者が件の殺人鬼だとしたら、相当な実力者である可能性が高いと想定されていたため、応援に向かうべきであるが出現したモンスターへの対応に人手をこれ以上出す事が出来ずにいた。そこで、今戻った私に・・・という事みたいだ。

「はい、了解しました」

団長の指示に反対などするはずもなく、すぐにアイズの元にへと駆ける・・・込み上げてくる感情と共に・・・

(・・・レフィーヤちゃんの為にも倍返し・・・ですね！)

九話 ううーん？少し踏み込みすぎたかもしれない・・・ま、いつか！

「ーっ！」

襲いかかるのは剣による斬撃。その一つ一つが重く、受けて防ぐことはできても反動によつて私は反撃を行う事が出来ていない・・・

「風」を全身と武器に纏い攻撃力、防御力、機動力を向上させる【エアリアル】を使用してもこの状況である・・・

・・・「風」の優位性を考慮して空中での戦闘に持ち込んだのだが、規格外の跳躍力による対空時間の確保で攻撃の威力や機動性に変化はない。

斬撃を剣で受けるがすぐに蹴りを受け、地面に叩きつけられる。

受け身を取り、すぐに起き上がり構えを取る。しかし、確実にダメージが積み重なっていて息が上がる・・・

肩を大きく揺らす私に対して女は言う・・・

「便利な風だな『アリア』・・・その名前をどこで!?!」・・・

彼女の発言に私は大きく動揺してしまっているだろう。彼女は私の問いには答えない・・・私の疑問が晴れないままに彼女は向かってくる。

先ほどから相対している彼女。私に一度も反撃を与えずに完封していた状況、どう考慮しても・・・

(・・・私よりも・・・強い!!)

(だとしてもー)

正面に跳ぶ・・・彼女は私に向けて横薙ぎで剣を振るう。

「風」を使い、斜め下に変速移動させて回避する。瞬時に死角への強制瞬間移動を行い、彼女の背面を捉える・・・そのまま剣を振るう・・・

(この一撃に全てを!!)

背後からの攻撃・・・ありきたりであろうが、敵が瞬間に目の前から消えたのであれば実力者であっても動揺は生まれるだろう。

しかも、私の俊敏のステータスは高い方であり、さらに「エアリアル」によって更に向上されている・・・であれば、攻撃を与えることは出来る・・・はずであった。

「人形のような顔をしていると思ったが」

・・・剣に感触はない・・・私は空を切った。

死角であったのにも関わらず一瞬も動揺せずに身体を低くし、攻撃を回避した。

同時に、私の耳元で囁く・・・

瞬間・・・彼女の足元が砕かれる、剣を振るう時の踏み込みだ・・・

私は先ほどの一撃で仕止めようと剣を振った・・・こうでもしなければ殺されるからだ。

であるからに・・・避けられた後の対処など考慮する余裕もなく、今の私は十分に回避行動を行える状況ではない・・・

（【エアリアル】最だー）

かろうじて剣で受けることに成功した……が、瞬間に伝わる衝撃……その威力は腕から上半身に重く伝わり全体を強打された様にも感じてしまう……

意識を持つていかれてもおかしくない衝撃に耐えるも、私の身体は吹き飛ばされ勢いそのままに岩に身体を打ち付ける……力の入らなくなった腕からは剣が溢れ落ちる。

「……あ………う」

口から溢れるのは細い息のみでしかない。

（っ………!? 身体が……動かな……!?）

身体を動かそうとするが、力の入れ方を忘れてしまったかのように動かない……岩に身体を沈ませている私に歩いて向かってくる彼女……どうやら勝ちを確信しているのであろう。それもそうだ、今の私は身動き一つ出来ない状態であるから確実に仕止められる……

（動……いて……動いて!!）

自分に言い聞かせても反応することはなく、彼女との距離は近くなつていく……

彼女の持っていた剣は先ほどの一撃によって破損してしまったのだらうか、刀身が無くなつてた。それを捨てて拳を握り込む……

「やっと終わりだ」

その言葉と共に振りかぶった拳が私に向かい迫る……身構えることも出来ずに直後に訪れるであろう衝撃に恐れを覚えた……瞬間……

目に映るのは・・・迫っていた拳が腕ごと空中を舞う光景・・・

回転させながら鮮やかな血を吹き出し、放物線を絵描くそれ・・・腕の持ち主はというと腕を欠損したことへの動揺だろう理解出来ない様子であった。

瞬間、停止状態であった彼女の頭が大きく揺れ、身体が左方向に飛ばされた・・・

斜め下方向に飛ばされて地面に衝突したものの、勢いが止まらずに地面を削る・・・

彼女と距離ができたところで、私を守るように目の前に立つのは・・・

「・・・し・・・紫苑？」

「・・・あ」

――

(え!?! アイズやばくないですか!?)

私がアイズを見つけた時に彼女は岩に向けて飛ばされていた。防御を完全に行う事ができなかつたのであろう・・・ダメージによつて身体を動かす事ができないようだ。

アイズがここまで苦戦する相手であれば、それ以上の実力を持っていることは確定だ。最悪Lv6の可能性も考慮される・・・

もしそうであれば防御力は相応に高く・・・上段からの振りでは私

の体重が足りずに骨を断つことは難しくなるかもしれない。

ならば、下段からの振り上げと合わせて脚力を使い、力を増大させれば断つ事が出来る・・・と思う。

攻撃は決まった・・・が、相手は『人』だ。

・・・・・・・・それが私の中に抵抗を覚えさせる。

冒険者同士で殺し合うのは珍しくない。それも、仲間が危険な状況なら考えるまでもなく相手を殺すべきであろう。

そうでなければならぬのに・・・手が震える・・・心が乱れる・・・
思い出す・・・??に染まる・・・・・・・・

込み上がるそれを押し殺す・・・私が躊躇してアイズが殺されて良いはずがない。

精神を落ち着かせる・・・震えは・・・止まらないが、許容範囲。

(大丈夫・・・やれる。)

幸い彼女^{てき}は私の存在に気付いていない様子である。

彼女は動けないアイズに歩くように向かい、拳を振り上げた・・・

(・・・今!!)

彼女の斜め後ろ方向から低姿勢で跳ぶ・・・両手で持った大の刀を脇構えで持つ。

彼女の腕が伸ばされようとした瞬間に横に着き、刃が入りやすい様

に斜め方向に斬り上げる。同時に低姿勢だったために落ちていた腰を瞬発的に上げてより力を加える・・・

(!?・・・重っ!? でも・・・いける!!)

骨だろうか抵抗を感じる・・・が強引にも押し上げて断ち切った。そのまま、斬り上げた時の勢いを殺さずに身体を回転させ、足を踏み換えて左足踵で左側頭部を回るように蹴り薙ぐ。

彼女は土煙を上げて地面を抉りながら飛ばされていく。

体勢を元に戻して構え直した・・・時に鼻に『液体』がかかる・・・

(・・・?)

上から落ちてきたそれが何なのか疑問に思い顔を上に向ける。すると、顔全体に『液体』が吹きかかる・・・それが眼に入ったが、瞼を閉じることなく・・・視界を赤くしながら美しいそれを視る。

・・・血を撒き散らしながら宙を舞う腕――

視ると同時に顔に付着した血の匂いが脳内を駆け巡る・・・

『ドクンツ』

(・・・あ)

「・・・し・・・紫苑？」

「・・・」

(やめて)

耳に入るのはアイズの声だろう……返答した方がいいだろうが、そんな事よりも……

気持ちが高揚する……身体が火照る……息遣いが荒くなる……角が疼く……

私の目を釘付けにするのは未だ血を流す切り落とした腕。

何よりも斬った時の感触……違和感はあつたがモンスターとは違う……人特有の……そして人を斬ったという「事実」が私を……酔わせる……

「……もつと……」

(ちがう、ちがう……)

思考が狂う、本来ならアイズを守らなければならない……わかっている、わかっているが麻薬を打った様に??が求めてしまう。

ふらつくような足取りで彼女が飛ばされた方向に足を運ばせる……と、土煙の中から勢い良く飛び出してきた。

現れた敵を見て更に気分が高揚する。

彼女は正面から向かってくる……が、瞬間で動きを停止させる、フェイントだ。タイミングをずらしての打撃を仕掛けてくる。

それを冷静に読み、回避を行う。

空振りに終わった彼女は次の攻撃に出ようとするが、踏み出せずにいたようだ……

腿に深々と突き刺さった小の刀によるものだろう、私が回避を行つたと同時に突き刺した。表情には出してはいないが、機動力を奪うには十分なダメージを負ったであろう。

刺さっていた刀を無機質な表情のまま引き抜き、構えて私に向かい刀を振るう。負ったダメージによりスピードは落ちている・・・

そんな彼女の攻撃に対して・・・人差し指から小指までの4本を・・・

斬り落とす・・・

握るための道具を失った手からそのまま刀がこぼれ落ちる・・・彼女が落とした刀を地に着く前に取り・・・胸を狙って突く・・・が、左腕で弾かれてしまう。

一度距離を取り彼女の様子を観察する。手から滴る血・・・

それを目に焼き付ける・・・惚れてしまったように心臓が五月蠅く動き、顔に熱がこもって紅く化粧をしてしまう。

火照り、熱くなった身体を自分自身で抱きしめる。

「・・・最っ高!!」

(ちがう! 違う!!)

すぐには??さない・・・せつかく出来た素晴らしいこの状況を一瞬で終わらすなんてつまらないから・・・

でも・・・彼女は面白くない・・・泣かないし、叫びもしてくれない・・・でも、まあいっか。

「気持ちいいし!! 楽しいからね!!」

(違う・・・私は、『彼ら』とは・・・)

湧き上がる衝動を抑えきれずに彼女の方向へと跳ぼうとしたとこ

ろ・・・

背後に気配を感じて右手の小の刀で横薙ぎに振おうとしたが・・・腕ごと掴まれてそのままに後ろへ回され、地面に押さえつけられた・・・

「!? つうーっ!!」

「そこまでだよ、紫苑」

これからなのに！ふぎけないで！など頭の中で不満が爆発する。抜け出そうと抵抗するが完璧に関節を決められてしまい動くことは出来ない・・・

快感がすぐ目の前にあるというのに得る事が出来なくなってしまうた、その不快感が自分を染め上げる・・・

「あああああ!!ーっあーー」

自分の不快感の要領を超えてしまったのか、意識が遠のき・・・落ちた。

ーー

「・・・んっ・・・?」

「・・・あ！ き、気分は大丈夫ですか？」

目を覚ますと、目の前にはレフィーヤの顔・・・そして普段よりも近くに感じる声・・・頭に感じる温かく柔らかいもの・・・

膝枕をされていることを察する。された事はなかったが、想像していたよりも良いものの様に感じた。

暫く堪能していかうかと、私の目と合つて顔を赤らめている彼女に「もうちよつと・・・いい？」と聞く。

更に顔を赤く染め上げて「ひゃ、ひゃい」と了承してくれた。

どうやら私はフィンに抑えられた後に気絶してしまつたらしい・・・最近多い気もするが？

彼には謝っておかなければならない・・・そして、見ていたアイズにどうやって誤魔化そうか・・・

ふと疑問に思いレフィーヤに聞いてみる

「私のこと・・・なんか聞いてる？」

「・・・？ 犯人との戦闘で攻撃を受けて気絶・・・としか聞いてませけど？」

その場にいたアイズは仕方ないにしても、他の皆んなに何も伝えていないフィンにありがたく思う。

十分に膝枕を堪能できたので身体を起こす。すると「・・・あ」なんて何故か寂しそうに声をレフィーヤが上げたが気にしないことにした。

部屋を出て外へと向かうと皆んなが集まっていた。

周りの状況を見回すとリヴィラの冒険者達が作業を行っていた最中であることなどから私の寝ていた時間はそう長くは無かつたみたいだが、テイオナが「あぁー！ やつと起きた！」なんて言つたりしていた。

どうやら、これから下の階層に進むらしい。

戦闘大好きっ子であるテイオナは待ちきれずにいたみたいだ。そんな彼女に「お待たせしてごめんなさい」と丁寧に謝っておく。

そして・・・普段の表情でいるフィンの元へ向かう。

「・・・すみませんでした」

「いや、あれは僕の采配ミスだったね。謝るのはこちらだよ、申し訳ない」

彼は私を庇ってくれる・・・が、抑えられなかったのは私の失態だろう。彼は暴走した私を抑えてくれたのだ感謝しかない。

フィンの後ろにいたリヴェリアも私が暴走したことを知っているように厳しい視線を向けられ、私は肩をすくめてしまう・・・

「・・・紫苑、あれって・・・なに？」

「!・・・ごめん・・・言えない」

落ち込んでいるところにアイズがいつも無表情の顔を難しそうにしながら聞いてきた。

その問いを誤魔化そうと考えたが上手く浮かんでこず、濁す事しかできなかった。しかし、彼女は詮索する様子もなく、ただ「・・・そっか」と言うのみであった。

そんな行動に少し救われた気持ちになった気がした・・・

十話 詰め込みすぎた感・・・

「・・・紫苑、落ちついて聞いてくれ。・・・【アストレア・ファミリア】が、壊滅した」

(・・・は?)

世界が凍りつく。

自分自身が理解する事を拒否するように思考を手放す。しかし耳には入っていて無理矢理に脳内に叩き込むように繰り返し先ほどの発言が流れ込んでくる・・・

意味がわからない・・・

【壊滅】・・・なにが?

【アストレア・ファミリア】・・・彼女達が?

・・・どうして?

そうだ!

問題は・・・彼女・・・あの人さえ生きていればそれで良い!!

「・・・リヴェリアさん!! 生存者は!?!」

きつと、大丈夫・・・

あの人は私を置いて行ったりしないから・・・

「・・・・・・・・リオン・・・・・・・・ただ一人だ」

「・・・・・・・・え？」

直接脳を強打されたかのような衝撃が襲う。目の前が歪み始め、方向感覚が失われて・・・・地面に立っているのかすら分からなくなる。

吐き気がする。巨大な箱に入れられて高速で振られている感じ・・・

そして・・・・目の前が暗転した様に靄が掛かり、身体に纏わりついてくる。引き剥がそうとしてもいつまでも掴んで離してくれない・・・

不快感の靄の中から理解したくない「現実」が形作られていく・・・

あの人が・・・・死んだ！死んだ？

おかしい！ありえない！あつてはいけない！

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う

一時期は毎日、悪夢のように見せられ続けていた記憶。何度も見せられていたのにもかかわらず、その絶望感の鮮度は劣らずに見るたびに私の心を握り潰す。

ここ数年は見えていなかったため、耐性が落ちていたのか錯乱状態が長く続いていた・・・

それでも、この症状が収まるのは毎度同じである。

(ああ、そっか・・・もう手遅れだ・・・)

これが頭の中で浮かぶと、スツと絶望感と共に症状が収まる。

・・・代わりに残るのは虚無感と頬を伝う涙。

心が落ち着き、まともな思考状態を取り戻し始める・・・この夢を見たのはきつと昨日のリヴィラでの暴走状態によるものだろう。

その状態はアレが終わった後から起こす事は無かったし、それと同時期に悪夢を見る回数も減ったから・・・

(はあ・・・)

ベットの上で膝を抱えるように座り、顔を埋める。・・・最悪な気分だ。いつまでも慣れる事のない消失感が残り、気力が湧いてこない。

思い出す事はある・・・いや、思い出さない日なんてない。しかし数年間見ていなかったこともあって、ポツカリと空いてしまった穴が抉り返された。

せつかく日常で埋めてあったのに……

気分は上がらないが、汗で不快感のある身体を流しに行くこととした。

ホームには団員達が共同で使用する浴場があるのだが、普段私はそれを使用していない。

その理由は自室にシャワールームがあるからである。元々自室にはシャワールームはなかったのだが……色々あつて設置することになった。

最初の頃は部屋のスペースが狭くなってしまい、良い気はしなかったのだが。今となつては毎度、浴場に向かう必要がなくなったので良かったと思う。

タオルと着替えを持ってシャワールームへ向かう。

少し濡れて肌に密着している寝衣をはだけさせる……張り付く不快感から解放されて落ちていた気分が少しだけ上向きになる。

シャワーの前に立ち、温水を流す……が、

「ぎゃつ！ 冷た!!」

温水が出ると思っていたのだが、出たのは冷水であつた。私の間違つて流してしまったのかと思ひ確認してみたが、しっかりと温水を流していることになっている。

少し時間を空けてみても、いつまでも暖かくなならない。故障してしまっているか魔石に不備があつたのかもしれない……

(……ついてないな)

こんな時に限つて故障するなんて……気分がより下がってしまう。

とりあえず汗は流しておきたいので久しぶりに浴場へ行くことにした。

今は早朝であり、団員達もまだ起きてはいない時間帯である。そのため、いつかのような騒動は起きないと思うし……

―浴場―

(……気持ち悪)

鏡に映るのは生気を感じさせないほどに白く……傷痕一つ残っていない肌……

頭からシャワーを浴びながら目の前の鏡を見ている。気分は最低であるし、過去を見せられたことでいつも以上に自虐的になってしま

う。
本当は誰よりも醜い筈なのに……自分の穢れなく透き通るような肌を見ると不愉快になる……

指で自分の額の角に触れる……

そして包み込むように握り、爪を立てて力を込める……

ギリツと鈍い音が鳴るとともに激痛が走る。その痛みに対応して力を緩めてしまう。

角は身体の中で感覚が敏感な部位であり、少しでも衝撃を与えると痛みが発生する。

憂鬱な気分になると行ってしまう……俗に言う

『自傷行為』

・・・と言うものだろう。

手軽で簡単に行えるし、周りから気づかれる心配もない事から長くこの手段で続けている。

刃物で身体を傷つけるよりも痛いし・・・

自傷して気分が晴れるかと言われるればそんなこともないのだが・・・落ち着く？そんな感覚になる気がする。

痛みが引いては、また繰り返す・・・

暫くして落ち着き始め、手を止めた。何度も傷付けた角からは血が通うたびに重い痛みが走る・・・その痛みが思考力を鈍らせ、自虐的思考を薄れさせてくれる・・・

普段は角の先になるにつれて赤黒くなっているのだが、傷付けたことで全体がその色になっている・・・そんな変色した角を見てより心が落ち着いた気がする・・・

・・・今の浴場には想定通りに団員達は居ないのだが、朝湯に入る団員もいるだろうから早めに上がることにした・・・

「あ、ラウルさん。おはようございます」

「・・・？ は、はい。おはようございますっす」

浴場を出ようとドアを開けたところ・・・丁度彼が入ろうとしているのだろう、全裸でそこに立っていた。

まだ早い時間だったため、誰もいないだろうと思っていたこともあり驚いてしまったが、とりあえず挨拶しておく。

目の前の彼は不思議なものを見たように目を点に変えて固まっていて、少ししてから気が抜けているような声色で挨拶を返してくれた。

フラフラとした足取りで浴場に入って行った彼を見てから自分の着替えを入れていた籠の位置に立ち、身体に巻いていたタオルを外してて・・・濡れた肌を拭き始める。濡れた髪からは水が流れ落ちてきってしまうため、頭にタオルを巻いておく。

ひと通り身体を拭き終わってから白衣の袖に手を通していく・・・極東の服であるため、少し着替えるのに時間がかかるがいつものこと。脱衣所に設置してある鏡へ向かい、綺麗に着付けられているか確認しておく。

それからタオルで髪的水分を取り始める・・・私の髪は長いため時間がかかってしまうが、丁寧に行く。これを行っている時間は何気に好きなことでもある。

暫くして、納得のいくまで乾いたので脱衣所を出る・・・

「ええええええええええええ!!?!」

浴場からホームに響く程の叫び声が聞こえた・・・

――

私は現在、食堂で朝食をとっています・・・

目の前には紫苑さんが座っているのですが、朝からある噂がファミリア内に広まっています。その噂のせいか食堂がいつもよりもざわついている気がします。

その噂とは・・・紫苑さんが男性浴場を使用していた。

と言うものです。どこから発信されているかは知りませんが・・・「どうかしています！紫苑さんがそんなことするはずがないのに！」

と思いますが、不安感が抜けきれずに私もソワソワしてしまつて食事に集中できずに手が止まつてしまいます。

紫苑さんと言うと、普段と変わらない様子です・・・そんな彼女を見ていると噂の信憑性が薄れていくように感じます。

手を止めて彼女を見ていた私を不思議に思つたのか、「・・・?どうしたの、レフィーヤちゃん?」と声を掛けて貰いましたが、焦つて変な声を上げてしまいました・・・。

こんな調子ではいけないと思い、思い切つて彼女に聞いてみることにしました!

「・・・あ、あの・・・紫苑さん。今日の朝、浴場に行きましたか?」

「・・・? はい、朝湯をしてきましたよ?」

(!?)

そもそも、彼女が朝に浴場へ出入りしていなければ噂は確実に嘘になると考慮しての質問だったので・・・それが事実であるとなると噂の信憑性が格段に上がり、想定していたことと違う結果に驚愕してしまいます。

もしも、本当に彼女が男性浴場に入っていたとすれば・・・

いつもの彼女は穢れの一つも知らないようで清楚に感じられ・・・外見だけではなく内面も、とても優れている。エルフである私でさえも彼女そのものに惹かれてしまっている。

そんな彼女が・・・

もしも・・・

痴女だったとしたら……

―男性浴場―

夜の警備を終えた俺は寝る前に身体を洗っておこうと浴場に向かった……

朝早くであったため他の団員はいなかったものでゆつくりと湯船に浸かって身体を温めていたのだが、先ほどまで警備をしていた疲れで少し眠気が出てきてしまい、ぼーっとしてしまっていた。

……そんな時に脱衣所のドアが開けられ驚き、ついビクついてしまったが開けられたドアの方向を見てみる……すると、

先ほどまでの眠気が一気に消え去って行った……

ドアの前に立っているのは……タオルで前を隠している……女性の姿。

『紫苑』

「ロキ・ファミリア」のレベル5である第一級冒険者だった。

その驚きで混乱した俺は本来ならば目を逸らした方が良いのだろうが、男としての本能が覚醒してしまい、彼女の白い肌を目に焼き付けるように凝視していく……

いつもの俺は大事な場面で怖気付いてしまうのだが、今の俺はチャンスをしつかりものにしていく気がする……男になれた……そう感じた。

混乱状態であった為か、変な感動に浸りながら凝視し続けていたの

だが段々と、まともな思考力が取り戻され始める・・・

なぜ彼女が男性浴場に入ってきているのか？

当然の疑問が脳内を駆け巡る。

もしかしたら、俺が間違えて女性浴場に入ってしまったのかと考え
てみるが、内装などからも普段使用している浴場と代わりなく、男性
浴場であることが伺えた・・・なら、何故？

疑問符が大量に頭を埋め尽くし始める・・・また混乱状態に陥って
しまいそうだ。

頭を抱えながら理解できない不安感に悶えていると・・・ひたひた
と音を立てながら彼女がこちらに近づいて来た。

先ほどまでは湯気で鮮明には見えていなかったのだが近づくこと
で白い肌が鮮明になり、俺の視線を吸い込んでいく・・・

美しい身体の曲線に生唾を飲み込む。胸の膨らみは見られない
が、細い全体であるからこそ、そそられる・・・

彼女の身体に意識が全て持っていかれてしまっ、いつのまにかす
ぐそこに彼女がいることに気づかなかった。ハツとして彼女の顔を
見ると・・・普段の彼女からは見られない惚けた表情がそこにはあっ
た。

その彼女の表情から察しがついてしまった・・・

見るからに彼女は昂っている。目を見ても何か熱を孕んでいるよ
うな・・・そんな瞳。

その瞳に心を奪われてしまう・・・彼女は湯船の端の辺りで立ち尽
くして硬直している俺の前に、脚を横に流すようにして腰を落とし、
手で撫でるようにして俺の頬に触れてくる。

突然の接触到に身体が反応してしまう・・・

彼女はビクツとした俺の反応が面白かったのか薄く笑みを浮かべ
ていた。それから頬にあった手を顎の辺りまで撫でながら移動さ
せ・・・

俺の下唇を親指で横に撫でる。

同時に妖艶な雰囲気纏わせながら俺の目を見つめて・・・

「・・・ねえ・・・しよっ。」

――

「・・・」

新人団員を誘う痴女紫苑さん・・・もしかしたらこんな事が起きていたのかもしれないと、妄想してしまいました。

いつもの清楚な彼女のからは想像つかないが、もしかしたら隠れてこの様な事を行なっているのかもしれない・・・

勿論、私の勝手な妄想なので実際どうか分からないですし、多分この様なことは無いと思います。

ですが、なんと言うか・・・痴女な紫苑さんの事もあまり良く無いと思うのですが・・・紫苑さんが他の人と関係を持つ事自体が、

(・・・嫌だな)

勝手に妄想して勝手に不快な気持ちになっている自分自身にどうかと思ってしまうが・・・気に入らない。

彼女は私のモノでは無いはずなのに湧いてきてしまう独占欲？の様なもの私の心を締め付けてきます・・・

(・・・そうだ、なら私とのソレを・・・)

「紫苑さん、これでリヴェリア様に頼まれていた本は揃いました」

私と紫苑さんは二人で書庫に来ていた。元々頼まれていたのは私だけだったのだが、途中で会った彼女に手伝うと伝えられて・・・といった経緯である。

二人掛で本を探していた事もあり、指定されていた本はすぐに揃った。特に急いで持つてくるものでも無かったのだが早めに済めばそれで良いだろうと本を運ぼうと持ち上げようとした・・・が、

「!?・・・し、紫苑さん?」

私の手には抑える様に白い手が包まれていた・・・触れられる事が少ないため、急な出来事に驚きつつも下をむき続けている彼女に向けて声をかける・・・

無言なままの彼女・・・もう一度声をかけようと口を開いた時であった。彼女の手が私の手首を抑える様にして力を入れた。同時に私の手を上に持ち上げ・・・「きゃっ」と声を上げた私を気にする事なくそのまま後ろにあった本棚に抑えつけてしまう。

レベル5の力、ましては魔導士の私の力で抵抗出来るはずがない・・・

彼女に対して少し恐怖心を抱いてしまつて怯えた様子で質問をかける・・・

「・・・紫苑さん・・・ど、どうしたんですか?」

未だ俯いて沈黙を続ける彼女であったが、顔を私の耳元に近づけて囁く・・・

「・・・ごめん、もう我慢できない」

熱の籠った彼女の声色が私の耳をくすぐる。

彼女の声は背中に伝わりゾワゾワと感じさせ、彼女の発した言葉に心臓が揺れる：・同時に『どこ』かに熱が籠っていくのを感じた：・私は想定外の発言に言葉がでずに悶えてしまう。まだ彼女の顔は耳元であり、息が耳をくすぐり続けていたのだが：・

「!? くっ：・あ：・んっ：・：・」

「ちゅ：・あっ：・：・ちゅっ：・：・」

首元に暖かく柔らかいものが当たったと思ったら：・痛みが走った。

抑えられて動く事も出来ないのだが：・不思議と逃げると言う気が湧いてこない。それよりも与えられた痛みにどこか快感を覚えてしまっている気すらしていた。その快感を耐えるために噛み締めているものの堪えきれずに口唇から喘ぐように漏れてしまう。

噛まれたり吸われる度に膝がガクついてしまい、立っていられなくなってしまう。

長く感じられた時間が経過してから彼女は満足したのか首から口を離してしまう：・

「：・：・あっ」

快感が終わってしまい、名残惜しく感じて惚けた声を発してしま
う：・

目の前には彼女の顔：・口元からは銀色の糸があり、それはどこかに繋がっている様であった。分かりきっている糸の繋がっている場所を指で触れると、濡れていた。その液体の正体を考えて、また『どこ』かに熱が籠る。

これだけの事をされてしまえば彼女がこれから行おう事

しがついてしまう……

「……紫苑さん……私たち、女性……同士……です、よ？」

無意味な質問だと分かっているが聞いてみる。彼女はまっすぐと私を見つめて……

「……関係ない……レフイーヤがほしい」

いつもは違う名前の呼び方……それにドクンツと胸を貫いた気がする。瞳からは真剣さが感じられて、本気なのだと理解してしまう。

……断る理由などない。私だって……

「……私も、貴方がほし……んっ!？」

彼女に思いを伝えようとした時にいきなり口を塞がれてしまう……

「っは……んっ……あっ……ちゅっ……」

喋っていた最中だった事もあり口を開けていた為、彼女の舌が無遠慮に私の口内へと侵入してくる……柔らかい舌が私の舌を絡めてくる。知らない感覚であったため逃れようとするもの頭を手で抑えられて逃れられず。グツと、より舌を侵入させて貪ろうとしてくる……

「紫苑さんとキスしてる」という事実とキス自体の気持ちよさに脳がチカチカと弾けていく……その快感をもっと感じたいと思い、私も彼女の舌に絡め始め……溺れていく。

口内にはどちらの液か分からないほどに混ざり合っている。口を離した時にはまた銀の糸が伝っていた……

「……ここ、これ以上はやめておきましょう。戻れなくなってしまう
 そうですし……」

「ですが、満足です！ 紫苑さんでこんな妄想してしまうなんて申し
 訳ないですけど、先ほどの不快感は薄れてくれました。」

「でも……本当に紫苑さんが私にあんな事をしてくる事は……
 無いかもですが、少しだけ期待しておく事にします。」

「罪悪感を覚えながらも紫苑さんの顔に目を向ける……と、気づい
 たことがありました。」

「……彼女の角です。今まで見た事がないほどに全体が赤くなつて
 いました……」

「あの……紫苑さん、……角、どうしたんですか？」

「え？ ああ、なんでだろうね？」

「彼女自身も分かっていない様で、そう答えました。本当に分かって
 いないのか、それとも誤魔化しているのか……」

「とにかく、あまり詮索しない方が良いでしょうと感じてそれ以上は
 聞かない事にしました。」

「代わりに話題を変えてみます。」

「そうですか……なら、今日は何か予定はあるんですか？」

「そうですね、今日は「ヘアアイストス・ファミリア」と「ディアンケ
 ヒト・ファミリア」にいく予定です」

「あの、私も一緒に行っても良いですか？」

「ええ、良いですが、つまらないかもですよ？」

「大丈夫です！ 紫苑さんと一緒にいければそれだけで楽しいですか
 ら！」

やった！と私は心の中で大きくガッツポーズをします。怪物祭モンスターファイリアでのお願ひしたご褒美がこんなにも早く叶うなんて嬉しく感じてしまいます。

しかし、彼女は上機嫌な私を見て微笑みながら「怪物祭モンスターファイリアでのご褒美とは別だからね」と言ってくれた・・・優しい。

お互い朝食を摂り終わってから支度が終わり次第、町へ出ることでありそれぞれの部屋へと戻ることとなりました。

とても楽しみです!!

十一話 今回はラブコメ感だぜ??

「・・・それで、今日は「ヘファイストス・ファミリア」で新しい装備でも買うんですか?」

「はい、この前の戦闘で刀の刃が歪んでしまつて・・・」

私と紫苑さんは「ヘファイストス・ファミリア」の本拠地へ向かつて歩いている。行き先から考慮すれば目的は簡単に予想はつく。

紫苑さんは私の質問に対して、左側の腰に刺してある剣を撫でながら落ちた声色で答える。

彼女はその剣を大切に扱っていた。私が「ロキ・ファミリア」に入団した時から同じものを使用していたし、彼女曰く父親から貰った剣らしく今までも全てその剣で戦闘を行っていたらしい。

そんな背景もあって今の彼女は気落ちしているのだろう。あんなにも大切にしていた剣が使えなくなつてしまったのだから・・・

そこで世界クラスのブランドである「ヘファイストス・ファミリア」に行つて直して貰うといった所だろう。

「・・・直ると良いですね!」

「うん、そうですね」

少し悪くなつてしまつた雰囲気を立て直す。

私の言葉に彼女は笑みを浮かべながそう伝えてくれる・・・

その間を遮るのは薄い桃色の布・・・

私に向けていた顔を前に戻し、少し前を歩き出す彼女を見て・・・

(今日は着けてるんですね・・・)

ホームの門の近くで彼女を待っていた時からなんとなくそんな気はしていた……

案の定、待っていた私に対して「ごめんなさい、お待たせしてしまいましたか？」と、急いだ様子で私に向かつて走ってくる彼女の格好は……笠を被った、いつもの外出時の姿であった。

そんな彼女の姿を見てどこか気持ちが重くなったのを感じた……特段おかしい事もないはずなのだ、笠を被る理由も十分に理解はできている。だが……そう言うことではないのだ。

『私では貴女の横にはいられない』

……そう言われている気がしてしまった。

確かに今まではそうだったかもしれない……だけど、怪物祭の日から変わろうと……『救う』と決めたのだ。

今はまだまだ。だけど、いつかは私と隣にいる時に笠を被らずにいて欲しい……そして、彼女を忌避する人がいなくなれば嬉しい。

……そう、改めて決心がついた気がする。
揺れる美しい黒髪を見つめながらそう思った……

――

日も完全に落ちていて、雨が酷く数メートル先は見えない……まるで暗闇に閉じ込められている様であった。

「……」

進んでいる方向も分からずに、ただ勝手に引かれる方向に足が動いていく……地面は雨によってぬかるんでいる。歩きたびにグジュグジュと沈み、足の指の間に泥が纏わりつく。どうやら裸足で出てきてしまったらしい。

「……あ」

暫く歩いていたが、そこでピタツと足が止まった……目の前にあったのは『ナニカ』と地面に突き刺さった刀であった。良い刀かどうかは分からない、ただ、武器はこれから生きていく為に必要だと思った。刀を手に取ろうと柄を握った時、付いた液体に少しの温もりを感じた気がした。

「……？ えいつー！」

そのまま引き抜こうとする。突き刺さるそれは長く、身体を精一杯上に伸ばして抜いた。

「つと、と、と、」

引き抜いた勢いで体勢が崩れてしまう。今の私が扱うには大きすぎる気がするが問題はないと思う。

刀身だけ持っていても不便なので地面に伏せている『ナニカ』の腰に差してある鞘を引き抜き、納める。

それと、もう一つの刀が差してあったのでそれも使わせて貰う事にした。

その時に『ナニカ』が呟いた気がするが……どうでも良い。

私はまた暗闇を歩き出した………

(……あれ？ これ私の記憶?)

刀の柄に触れていたところ、いつの間にか思い出に浸っていた。

その中の一つに身に覚えのない記憶？が浮かんでいた。いや、身に覚えはある・・・だけど異なる点が多くあった。

(私は・・・お父さんを探しに慌てて走って・・・)

・・・そうなのだ、確かにあの雨の日の記憶はある。しかし、さつき浮かんだ記憶とは雰囲気は全く違う。

夜中にふと目が覚めたら横で寝ていたはずの父親がいなくなっていた。胸騒ぎがして外を駆けて探していた所・・・血まみれで倒れた父親を見つけた。

(・・・お父さんは、「愛してる」って伝えてくれて・・・)

最後の言葉と共にこの刀をくれた・・・はずだ。

記憶が混在する様で気持ちが悪くなってしまう・・・頭では浮かんだ記憶は偽りであると思っっているのだが、心が腑に落ちていない気がする。

(・・・まあ、取り敢えずは良いですか)

考えていても答えは出ない気がするので、ひとまずは先延ばしにしておく事にした。

・・・そんな事を考えていた所、いつの間にか「ヘファイストス・ファミリア」の本拠地に着いていた。

――

「椿さん、入りますよ」

返事はない。しかし工房の扉の向こうから聞こえてくるのは金属を叩く音・・・強く、重く、激しい、そんな音・・・彼女がそこにいるのはこの音が聞こえてくるだけで分かる。

返事がないのはいつもの事だし、彼女にも勝手に入ってくれば良いと言われている為、扉を開ける・・・同時に熱気が顔にかかる。その熱に目を瞑る。

目を開けると、こちらに気付いていない様で熱心に小槌で打ち続けている彼女がいた。

突然の訪問であったし、彼女の邪魔はしたくは無かったのでひと段落つくまで待っている事にした。

部屋に入ってから少し時間が経過した頃であった・・・彼女が私たちの気配に気づいたらしく、打つ手を止めた。

「紫苑！ 居るなら居ると言えば良いものを！」

「ごめんなさい。邪魔はしたくなかったので」

「それで？ エルフの少女を連れて何の様なのだ？ まあ、どうせまた刀の修繕なのだろう？」

「・・・ええ、でも！ 今日の特注品オーダーメイドをお願いに来ました！」

私は彼女に毎度のこと刀の修繕を頼んでいる。当然、彼女は「ヘファイストス・ファミリア」の団長であり最高の鍛冶士であることは理解している。そんな彼女に修繕のみを頼んでいたことはどうかと思ってしまうが、専属契約を結んでしまっている以上、彼女に頼むしかないのであった。

当然の如く彼女の修繕は完璧であり、今もまだ使用出来ているのは間違いなく彼女の腕があつてこそだと分かっている。

今までの注文内容から私が今回も頼むのは修繕だけだと予想していた彼女は私の発言に驚きの表情を示した。その表情は段々と歓喜に変化していった・・・

「本当か!? ああ！ 良いぞ、作ろう!!」

「はい、よろしく願います♪」

椿さんの嬉しそうな様子を見てみると私の方まで何故か良い気分になってしまった。そこまで私の特注品オーダーメイドを作成するのが嬉しいのかな?と思ってしまう、今までの事を申し訳なく思ってしまう・・・
それからは作成武器について話し合う事になった。

「・・・よし、まずは得物の種類についてだが、刀で良いな?」

「ええ、大小両方をお願いします。それと大刀なんですけど、今までの刀よりも刀身と柄をそれぞれ三センチ伸ばして欲しいです」

「ああ、了解した。素材はどうする?」

「特にこれといったものはないんですが、六億ヴァリス程であればすぐに用意出来るのでその金額で使える最高の素材を使って貰えれば良いですね」

「え!?! ろ、六億ですか!?!」

私が伝えた金額に対して驚いているレフイーヤ・・・今回頼むのは2本であるし、製作者は椿さんなのだからそこまで驚く事もないと思うのだけど・・・

私は今まで同じ武器を使用していた事もあつて素材に関しての知識は余り持ち合わせていない。ならば一流の彼女に一任して貰うのが妥当だろう。

「それ程の資金であれば問題なくお主に見合った最高の刀が作れる。

それと不壊属性デュランダルも付与しておこう」

「はい、楽しみにしていますよ」

「ああ、任せておけ。・・・それと、修繕もだったな」

彼女は渡した私の刀を抜く。

長年使用しているにも関わらず刀身の美しいものである・・・が、刃

の物打の部分が曲線美を歪めていた。彼女はそれを見て・・・少し考える様に黙っている。

「・・・何を斬った？ お主が技術でなく力任せで斬る事などそう無いはずだ」

「・・・ごめんなさい、言えません。ですが、刀を乱雑に扱ってしまつた事は反省してします」

「・・・そうか、まあ、この刀はお主が使うには無理があつたからなあ、そうか・・・次、またそ奴と戦うかもしれんから手前に作らせるといったところか？」

「え・・・あ、はいそんなところです。次戦つたら本当に壊れてしまうかも知れないですし」

「なら手前はそ奴に感謝しなくてはな！ お主の刀を作る機会をくれたのでな!!」

特に昨日戦つた女との再戦の為だとかそんなつもりはなかった。しかし、あの戦鬪で父親から貰つた刀では性能として私に見合っていない事は理解できた。もしも椿が作つた刀であればあの女の腕は容易く斬り落とせただろう・・・

それでも本当はあの刀をいつまでも使っていたかった・・・しかし、私が全力で斬れば刀は耐え切れずに砕けてしまう。そうなつてしまふよりも美しい状態で手にしていたと思つたからと言うのが本当の理由といったところか・・・

一通り取引が済んだところで、完成するまでの間に使用してくれと代替品として大小の刀を貸してもらつた。

流星は彼女の打つたものでそれぞれの刀はとても美しく、一目見ただけで一級品であることが理解できる。

この様な素晴らしい刀を使わせて貰うのは気が引けてしまふが彼女に使ってくれと押されてしまつて、ありがたく使わせて貰う事にした。

「ごめんね、レフィーヤちゃん。 退屈だったでしょ？」

「いえいえ、そんな事ないですよ？ 紫苑さんの装備には興味ありませんでしたから」

「そっか、それなら良かったんですけど・・・お昼にはまだ早いから今日は食べ歩きでもしますか？」

「はい！ そうしましょう!!」

「ハファイストス・ファミリア」に思っていたよりも長く滞在してしまっただが、それなりに早い時間帯からホームを出ていたので現在は正午前であった。空腹感は無くもないが料理店などで食事する程ではない。

私は以前から町へ来た時には屋台での食事をよく取っている。食べ歩きは読書に次いで私の趣味といったところだろうか？

稀に私の知らない食べ物売られたりしていて新鮮味も味わえて楽しいし、屋台ならではの雰囲気？が好きなのだ。

私の提案にレフィーヤが賛成してくれたので良かった。

「・・・!? レフィーヤちゃん！あれ、『抹茶くれーぷ』ですって!!」
「え!? ちょっと紫苑さん!?!」

私はレフィーヤの手を引いてある屋台へと駆ける。急だった為か、彼女は驚いているみたいだが気にせず向かう。

屋台の前に立つ・・・

甘く深く吸い込まれるような香りが鼻腔をくすぐる。それは上品さを感じてしまう抹茶の香り・・・それに包まれてしまうと、自らが

深くに落ちてしまいそうになる。

「ああ・・・良い匂いですね。レフイーヤちゃん」

「・・・はい・・・そうですね。あ、結構種類があるみたいですよ」

「ホントですね。悩みますが・・・『えんまち』にします！」

「それじゃあ私は・・・『ふしみ』にします」

「店員さん、『えんまち』と『ふしみ』を一つずつお願いします♪」

「はいよ」

『くれーぷ』を作るには、なかなか厳つい印象を受ける店員さんであつた。

彼は

鉄板の上に落とされたのは鮮やかな緑をした『くれーぷ』の生地：焼ける音と共に伸ばされたソレからは甘い匂いと抹茶の香りが立つてくる。

焼き上がった生地に盛り付けが行われて、最後に巻かれていく：

「はい、これは『えんまち』こっちは『ふしみ』だよ」

「はい！ ありがとうございます♪」

「ありがとうございます」

「合わせて32ヴァリスね」

私が当然のように二人分払う。

するとレフイーヤが「良いんですか？」なんて小声で言うものだから「当然ですよ？レフイーヤちゃんは良い子ですね」と頭を撫でておく。

顔を真っ赤にする彼女を眺めながら『抹茶くれーぷ』を食べる・・・サクツ

表面が火で焼かれていて、歯を当てると香ばしい音が鳴る。柔らかい生地に対しての固い食感が堪らない・・・

食感の後からは口に含んだことで鼻を抜けていく抹茶の香りが私

を蕩けさせ、口内のほろ苦い甘さがとどめを指す……

「うくん……最っ高!!」

レフィーヤの頭から手を離して落ちる頬を抑えるように当てる。「……あ」と声を溢す彼女の『くれーぷ』を見ると未だ手付かずであった。

「レフィーヤちゃん、とつても美味しいですよ?」

「え!?! は、はい。いただきます」

「……ど……ど……どうですか?」

「……ん……っ、美味しいです!」

とても良い笑顔を向けてくれた彼女に心が温かくなった気がして私も笑みを向けた……

十二話 アミツドちゃん回 そのいち？

「・・・？」

職務である夜間の治療院の見回りを行っていた時であった。2階の窓から正門の方を見下ろしたところ、暗くはあったが人影を見えた。

現在の時刻でも治療に対応は出来るのだが、その人は正門付近から動かずにいた。此処を訪れている事から、目的としては治療関連であろうと思うのだが・・・

不自然に思っつてその人の元へ行く・・・

辺りの街灯は少なく、注意して歩いていく。

正門に近づくにつれて暗くて良く見えていなかった姿が、明らかになってくる・・・

脱力する様に壁に寄りかかりながら立ち、顔を俯かせて長い髪を垂らしている。少し気味悪さを醸し出す彼女？に少し抵抗を覚えてしまう。

服装としては、極東の衣装を着ていた。黒い生地で衣装の下半身部分には白い花が咲いている。周りの暗さと同化してまるで、闇に咲いている様であった。

声を掛けようと彼女に近づく・・・

彼女の姿を、いま一度よく見てみると・・・服の有りとあらゆる所が切られている。そこから覗くのは肌の色ではなく赤黒い血であつ

た。しかも、その殆どの傷が酷く深いものであると見られる。ダランと下げた腕の先からは・・・ポタポタと血を垂らし続けている。

服の色と周りの暗さから目視するのに時間が掛かってしまった。傷の多さから判断するに相当量の出血量だ・・・明らかに致命傷であるだろう。

焦りを覚えるが冷静さを保ちながら彼女に声を掛ける・・・

「大丈夫ですか？ 治療致しますので・・・っ!?・・・すぐに治療院へ」
「・・・・・・・・あ、あの・・・良いんですか？ わたし・・・・・・・・」

彼女が渋っていたのは彼女の種族が原因である事はすぐに理解できた。

声を掛けた時に彼女の額から伸びている『角』が視認出来たからである。そして彼女の反応からも『鬼人』である事は間違い無いのだろう。

彼女は私が自身の種族に気づいても治療を行うという事に疑問に思ったのか、視線を外しながら絞り出す様に細い声で私に問うた。

その時の彼女の声色は・・・今からでも自殺するのかと感じてしまう程の絶望の色と何かを酷く憎む様な憎悪の色が含まれた・・・負の感情が込められている気がした・・・が、

「関係ありません！」

「!?っう・・・・・・・・」

彼女の負の感情を吹き飛ばす勢いでそう伝えた・・・

私自身も彼女の種族については当然知っている・・・が、目の前に生死に関わる怪我人がいるのだ。ならば私が行うべき事は決まっている・・・『癒す』ただ、その一つだけである。

その後急ぎつつ、身体を揺らさないようにと慎重にしながらも院内へ移動する。

「!? アミッドさん、そいつは!」

「治療を行います」

「っ! しかし!!」

「怪我人を殺すのですか!?!」

「っ!!」

正面玄関から入った為、受付にいた団員に止められそうになる。

彼女の姿を見れば種族はすぐに判断が付く・・・焦る心情も理解出来ない訳ではない。しかし、躊躇う団員を押しつけて治療室へ入る。

「・・・・・・・・よ・・・・よかったですか?・・・・・・・・」

彼女はベッドに横にさせると、消えてしまいそうな声で話しかけてきたが、「余り喋らないように・・・」と返して私はすぐに治療を開始する。

詠唱と共に光が生まれ彼女を優しく包む・・・
すると、感情を感じさせない彼女の表情が少し動いた・・・

「・・・・・・・・あ・・・・う」

・・・治療が行われたことにより安心したのか、意識を手放すように眠りに落ちた・・・

彼女の寝顔は血で汚れてしまっているがそれでも、整った顔立ちが目立って美しく見えた・・・

彼女が眠った間にも暫く治療は続いた・・・

「・・・失礼します」

傷は塞がっていても清潔に保つ必要があるので身体を綺麗にするのと、彼女の服を着替えさせる。本来ならば本人に確認を取ったほうがいいのだろうが、幸い私は彼女と同性であるのでさして問題はないであろう・・・

「・・・?・・・え!？」

―翌日―

衝撃的であった・・・

彼女は・・・彼であったのだ。

結局、私が着替えさせたのだが・・・昨夜は驚きの余り睡眠が取れなかった。そんな訳で頭の回転が十分に出来ていない気もするが気力で堪えて職務に当たる。

彼は暫くの間、入院するという意向となった。当然、入院患者には担当として団員が付くのだが・・・案の定、彼に快く付きたいと受けしてくれる者などいるはずもなく、引き入れた本人である私が彼の担当になった。

私自身は彼に対して特段大きな抵抗を持ち合わせていないので問題は無い。元々、私が彼の担当になるのだろうと予想も出来ていた。

そして、担当の職務として朝食を持っていくのと診察を行う為に彼の病室へと向かった……が、

「……居ません……」

人がいた痕跡が感じられない……昨夜、彼を寝かしていたベッドはシワのひとつもない綺麗な状態であった。治療院である事もあり、その部屋はより無機質さが際立っていた。

そして、部屋の備え付けのテーブルには治療費だろうか、それも必要以上の大金が置かれていた……

――

彼を治療してから約半年が経過した頃――

その日は急ぎの患者などは今現在は居らず、治療院の受付で職務を行っていた……

「……くっ」

少し高い位置にあるポーションに手を伸ばす……踏み台に乗って入るが、高さが十分に足りておらず背伸びをしてプルプルと震えながらそれを取る。

「……アミッドさん、【ロキ・ファミリア】の【九魔姫^{ナイン・ヘル}】がお呼びです」

「!?……すぐに行きます」

冒険者に指定されたポーションを無事に取り出す事ができてホツとしながら踏み台から降りた時に、固い表情をした団員が小声で私にそう伝えてきた……

「ロキ・ファミリア」……第一級冒険者と第二級冒険者が多数所属しており、現在のオラリオで最強ファミリアの一角である団体である。

しかも私を呼んだのは、Lv. 6であり「ロキ・ファミリア」の副団長である『リヴェリア・リヨス・アールヴ』らしい……治療院に来たという事はそれ程の負傷を負ってしまったのだろうか？しかし、団員の私への伝え方から感じるにその様な雰囲気では無い気もする……

もしもそんな状況であれば焦りが伝わってくると思う。

少し不穏に感じる所もあるが取り敢えず急ぎ彼女のいる応接室に向かう……

周りの部屋に比べて凝った造りになっている応接室の扉を叩くと「ああ、入ってくれ」と返事が聞こえ、入室する。

部屋の中にはリヴェリアさんが座しており、彼女は私の入室と同時に立ち上がった。同時に彼女の美貌を引き立てるかのように長い髪が揺れる……ここまで美しいものを見ると誰もが目を奪われてしまうのでは無いだろうか。

少しの間が生まれてしまったが私は彼女を再び座するようにと促す……

「急な訪問、申し訳なかった」

「いえ、全く問題はありません……ですが、貴女本人が来たという事は()自身に何か？」

「……いきなり本題というわけか……」
「……すみません、貴女に呼ばれてから気になっていたものでして……」

殆どの冒険者達は市販されているポーションで傷を回復させる。値段によってポーションの質は変化するのだが、「ロキ・ファミリア」であればその中で最高峰の『万能薬』^{エリクサー}を所持しているだろう。

それでも、直接此処に来ているともなればそれ程の重症なのかも知れないと予想していた。

しかし、部屋に入ってから見た彼女の姿は目視で負傷している箇所はなく、雰囲気からもその様なことは全く感じられていない。

もしも、私の予想が合っていたのであれば、これからの対応に目処が付くのだが……

「いや、大丈夫だ。それなら本題に移ろう……」
「はい」

「……【ディアンケヒト・ファミリア】に、ある団員の治療をお願いしたい……のだが、負傷している訳では無いのだ」
「……というところ」

「ああ、順を追って説明しよう、くくく」

それから固い表情をするリヴェリアさんからの説明を聞いた……

内容の第一印象は、『良くある話』に思ったのが正直なところであった。

その団員は……自殺未遂であるらしい。

数日前から、その者が自傷行為を行なっているところが目撃されていたこともあり最悪の状況になる事を想定して注意していた事が大事に至る前に阻止出来たみたいだ。

自身の首を得物で貫こうとしたところをリヴェリアさん本人が抑えたのだそう……

私が『良くある話』と感想を抱いたのはソレに至るまでの経緯である。

経緯としては、その団員の親しい友人達がある事件が理由で亡くなってしまったらしい。

残念であるが、冒険者であつたらしいので常に危険と隣り合わせである環境に身を置いていたのでそうなるのも特段違和感はない。

私自身も職業柄、人の死に関しては多くの経験を得ている……それでも、その団員と同じ症状に陥つた冒険者も数多く見てきた。

それでも、私が見てきたのはその中でも一部に過ぎないだろう。そう思ってしまう程にはオラリオに浸透したものである。

しかし、話を聞く限りでは些か過剰に過ぎる行動に思ってしまうが……

冒険者の中でも特に優秀な者が集まっている印象を受ける【ロキ・ファミリア】の団員にもそれに陥ってしまう人がいる事に少し意外に感じてしまった。

「……私は時間の経過で落ちていくけると予想していたのだが、想定以上に傷は深かつたらしくな」

「そのようですね……自殺未遂ともなると相応な対応が必要となる場合が多いですから、治療院へ来て頂いたのは最適な判断です」

「ああ……それで、頼まれてくれるか？」

「はい、善処させて頂きます」

「よろしく頼む……それと、その団員なのだが……治療以外に少し問題があつてな」

「問題とは？」

治療を行うと了承してからリヴェリアさんの表情が緩くなったと思つてからすぐに難しいものと変わってしまった。

彼女から新たに問題がある事を伝えられて私自身も身構えてしま
う。

「周知されてしまうと色々と面倒事が起きるかもしれないな、治療
を行う上でその団員に関して他言無用にして貰いたい・・・勿論、そ
の分の金は支払おう。そちらの主神にもそう伝えておいて欲しい」
「はい、患者の情報を故意に晒す事は致しませんので問題ないと思わ
れますが・・・」

「ああ、なら大丈夫だろうな・・・であれば、別室で待機させているの
だが今から連れて来る」

そう言つて彼女は席を立つ・・・確かに本人がいる場でこの様な話
をする訳には行かないと思うが、連れて来ているとは思っていないなかつ
た。

彼女が部屋から出たところから何やら胸が騒つく感覚を覚え始め
た。

先ほど伝えられた問題がある事に関して詳細を何も伝えてられて
いないので緊張が生まれてしまったのかもしれない。

僅かな時間が経過した時、重みを感じさせる扉がゆっくりと開いて
いく・・・

リヴェリアさんの後に入室して来た女性・・・

顔を覆う被り物をしていて詳しくは見れなかったが、流れる様な仕
草でそれを取る・・・

現れたのは美しく妖艶な雰囲気を感じさせる整った顔・・・その中
で一番に目を引いたのは特徴的な額の・・・『角』。そして、見覚えの
ある顔立ちが『彼』である事を瞬間的に私の脳が記憶と結びつける。

彼が抜け出した日に主^{ディアンケヒト}神にその事を伝えたのだが、金を置いて
行ったのならば問題は無いとすぐに話がついてしまったのだが、私と

しては、負傷の原因や、何よりもあれ程まで辛そうな表情をしている彼をそのままにはいけない気がして探したいと考えていた。

しかし多忙な事もあって時間を作る事も出来なかった為、直接行動に移る事は出来無かったのだが、治療院を訪れた冒険者などに『鬼人』を見かけた事はあるかと聞いたりしていたのだが殆ど確かな情報は得られなかった。

・・・あつたとすれば噂程度で、確か・・・『鬼の仮面』をつけた何者かがいる、といったものだ。

約半年間全く情報の得られなかった彼が目の前いる・・・そして【ロキ・ファミア】所属であつた事など、頭の中で爆発的に驚きが侵食し始める・・・が、

それを払拭するほどの何かが胸を叩いた・・・

視線と意識を奪つたのは、

「こんにちは、アミッドさん♪」

何重にも重ねて貼り付けたかの様な生気を感じさせない・・・歪な『笑顔』

(・・・ああ・・・こわれてる狂ってる・・・)

――

扉が開く・・・

入って来たのは2人。一人はエルフの少女・・・もう一人は顔を隠してはいるが雰囲気から美しさを感じてしまう・・・彼

「こんにちは、アミッドさん」

「はい、いらっしやいませ」

十三話 物語が進まん

「あれ・・・？」

目の前の光景に処理が追いつかないでいる・・・

私は現在、「ディアンケヒト・ファミリア」の治療院にいた。

紫苑さんの予定に同行させてもらって、先程は「ヘファイストス・ファミリア」で彼女の専用武器オーダーメイドの制作を依頼してきたところだ。元々、今日の目的は二つある様で一つ目がそれである。

そして、二つ目はアミッドさんにアイテムの採取を依頼されていたものを昨日のダンジョン探索で入手出来たため、届けるといったものらしい。

・・・目的としては、既に完了している。

誰とまでは言わないが、何処そのアマゾネスの様にギリギリまで値上げさせて売りつける事を紫苑さんはするはずも無いので、取り引きはすぐに済んだ。

紫苑さんは取引を終えた後、「では、失礼しますね」と短く言葉を発し、治療院を出ようとした・・・が、

「・・・あ、あの。もし、良かったら少しだけお話に付き合ってくださいませんか？」

との、アミッドさんの発言に出口へ向く足を止めた・・・

そして三人でこれといった題もなく、暇つぶしほど程度ではあったのだが会話を楽しんでいた。

・・・のだが、

現在、受付のカウンター机を間に、アミッドさんの頭を撫でる紫苑さんの姿・・・

普段のアミッドさんは撫でられることを良しとしないイメージなのだが、今の彼女は顔を俯かせながらも満更ではない少し緩んだ表情が見て取れた。

・・・彼女よりも背の高い紫苑さんからはその表情は見られないだろう。

完全に二人の世界に入り込んでいる・・・撫で始めてから暫く時間が経過したのだが、辞める気配もなく。最初は少し下がった位置に立っていたアミッドさんはカウンター机を乗り越えようとしそうなほど近づき、頭を撫でる手に引きつけられていた。

(・・・いつまでそうしてるんですか・・・)

永遠と続いてしまいそうな二人を見て、私の感情に靄がかかり始める。

最近から稀にこの様な気分になる事がある。彼女が気を失って、声を漏らしながら悶える姿を見た時に、良く分からない思いが浮かんでしまった。それからであろうか・・・

今までならば彼女と他の人が会話しているのを見ても特に思う事は無かったのだが、今は少しでもそんな光景を見てしまえば途端に胸が苦しくなってしまう・・・

そんな今の私に見せつけられている光景をいつまでも黙って見ていられる訳もなく、未だ撫で続けている彼女に声をかける・・・

「あの、紫苑さん・・・」

声をかけると同時にアミッドさん向ける彼女の表情を捉える・・・

優しさを含む微笑み。しかし、何かを思い出しているかの様な寂しさを感ぜさせる・・・そんな表情。

彼女が笑みを向けるのはいつもの事・・・少し思うところはあがあるが抑えは効く。

しかし、気づいてしまう・・・

(ドクンツ)

胸にずしりと重みを感じた・・・

アミッドさんを撫でる彼女の笑み・・・『本物』かどうかは分からない・・・だが、『歪』さが感じられなかった。

その事実には、より胸の締め付けが強くなる。私自身に向けられた事のない彼女のソレ・・・

(・・・・・・なんで・・・)

「あつ、ごめんなさい・・・つい」

「い・・・いえ、問題ありません・・・」

私の言葉で我に帰ったようで、アミッドさんの頭に置かれていた彼女は自身の手を引いた。

撫でられていたアミッドさんは、少し崩れた髪を手櫛で整えている・・・普段と変化ない紫苑さんの表情に対して、彼女は照れているのか目線を揺らしながら顔を赤くしていた。

そんな二人の様子にかけられる言葉もなく無言でそこに立ちつく

す。

「……………」

……すると、

「どうしたんです？……あ！ レフィーヤちゃんも撫でほしいんですか？」

「……………え？ えっ!!」

「いいですよ はい、よしよし」

「あう……………」

まるで、拗ねる子供をあやす親の様に彼女は私の頭を優しく撫でる……………

いきなりの事で、驚きながらも彼女の手の感覚にフワフワした心地良さを感じている……………

少しの期待を抱きながら。

……………せつかくのこの気持ち良さを崩してしまうかもしれない。しかし、確かめたかった。

(……………怖い、けど)

わざと彼女の顔から視線を外している。目を合わせるのが恥ずかしいと言ったこともあるが、また別の理由で……………

下方向からゆっくりと上に視線を移動させる……………

(ああ・・・やっぱり)

なんとなく予想は出来ていた。
それでも、「もしかしたら・・・」と思っってしまったのだ。

(『歪』んでる・・・)

(・・・ちよつとキツイな・・・)

「・・・つつ・・・。あ、あの・・・ごめんなさい・・・」

「えっ？ あっ！レフイーヤちゃん!？」

現実には耐え切れず、紫苑さんから逃げる様に外へと走り出してしまった・・・

――

「は、はっはあ、はっ・・・」

行き先もなくなただひたすらに走り続けていたところ、いつの間にか通りから外れていた。

ふと視界に入ったベンチに腰を下ろす・・・

荒れる息を鎮めながら徐々に冷静さを取り戻していく……。耐え切れずに勢いで逃げ出してしまったため、いきなりの事で紫苑さんとアミツドさんの二人には心配をかけてしまったかもしれない。

自分の感情に任せての行動への後悔が、冷静さと共に湧いてくる……

「……はぁ……」

紫苑さんの性格を考えると、今頃は私を探して街を走っていると思う。

私を撫でていた時に逃げ出してしまった状況からも、もしかしたら非を感じているかも知れない……そうでは無いのだが……

戻った方が良い……そう思つて腰を上げようとするが、先程の彼女の私に向けての「笑顔」が脳裏に浮かんでくる……

(……会いたくない)

まるで嫌なことから逃げる幼い子供の様だと自分自身に嫌気がしてしまふ。

それでも、どうしても体が動いてくれない。

もし今の状況の私が彼女と会ってしまったら……胸の痛みに耐え切れずに崩れてしまふかも知れない。

少し俯きながらこれからどうしようかと考えていたところ……

「やあ、エルフちゃん。どうしたんだい？そんなに酷い顔して♪」

「え？」

花卉が舞った・・・耳を撫でた声色にはそう感じられた。意識を刈り取る様な魅惑な音に引きつけられて俯く顔を上げる・・・

「・・・・・・・・!!」

互いに鼻が付いてしまいそうな程に声の主であろう女性の顔があつた。

視線が交差する・・・

整った顔立ちで、透き通り不純のない黄色の瞳、少し青みがかった艶やかな白い髪・・・

一目見ただけで魅了されてしまう程に美しいものであつた。

私は至近距離で目の前に現れた彼女に驚きの、身を引いた。すると、彼女は人を溶かすような魅惑さを孕んだ微笑みを私に向け・・・また、あの花の様な声音を紡ぐ。

「やっぱり・・・可愛いエルフっ子♪」

「・・・・・・・・あ、貴女は？」

「ん？・・・ああ、すまないね。初めまして、私は・・・・・・・・【ピロテース】。まあ、女神様さ♪」

「・・・・・・・・!!・・・・・・・・ピロテース様・・・・・・・・？」

彼女は私の問いに豊富な胸を突き出してそれに手を当てて上機嫌に自身の名前を答えた。

女神、即ち：超越存在《デウスデア》。見た目はヒューマンと全く大差は無いのだが、明らかに人とは異なつたプレツシャーを感じる。

気分を落としていた事で頭が回っていなくなつた私へ急に当てられた神威は、私の心臓を少し締め上げた。

予期せぬ事で驚き硬直してしまつたが、脈を落ち着かせながら、自

身の名を彼女に伝える。

「・・・私は、「レフィーヤ・ウイリディス」です」

「レフィーヤちゃん・・・うん、君とはとても良い関係になれそうだよ。どうぞ宜しく」

「は、はい。よろしくお願いします」

先程までの彼女の少し抜けた様な明るい声色ではなく、冷静さを思わせるものに聞こえた・・・

「それで、それで？どうしてレフィーヤちゃんはそんなに辛そうにしているのかな？」

「・・・えっ？・・・」

「うん、出会ったばかりだけど困っている子供を見過ごす訳にはいかない！話してくれたら力になるさ」

「そ、そうですね・・・」

私は初対面の神ひとに心配される程に酷い顔をしていた様だ。確かに、今の自分では紫苑さんの顔を見れる気は全く湧かない。

しかし、そうだからと言ってその事を知り合いの誰かに相談するにも気が引けてしまう。そういった状況で初対面の彼女を相談相手とするのであれば気楽に行えるかも知れない。

しかし、少し妙なのだが彼女に対して自身の警戒心が薄い様に感じている・・・。彼女の超越存在としてのものなのだろうか？

違和感を感じるが、彼女が私に対して善意での聞いてくれたことは間違いないと思う。

「・・・ちよっと、人間関係といえますか・・・」

「・・・うん」

「憧れの人がいるんです。同じファミリアで、綺麗で優しくて・・・とても強いんです」

「へえ、好きなんだ？」

「え!?・・・あ・・・す、好きですが、そういう意味では無い・・・です・・・たぶん」

「んふふ、ごめんね。続けて続けて？」

「は、はい・・・。そのですねー」

自分自身、何故これほどまでに胸が痛み苦しくなるのかが理解出来ていなかった。

我慢できなかった原因は紫苑さんが私に向けた『歪んだ笑顔』であろう。

私はどうしてか、彼女の歪さに特に敏感になってしまう。私以外の人の目にどの様に映っているのか分からないが、綺麗な彼女の顔を無理やりに、無遠慮に笑顔へ『変形』させた様に私には映っていた。

何故そんな表情を作るのか理解しがたかった・・・

「ふくん。そうだな、嫉妬？」

「し、嫉妬ですか!？」

「・・・それよりもすこし深いものかもしれないけどね。まあ、レフイーヤちゃんは多分自分以外の子に『歪み』?の無い笑顔を向けられたのが我慢出来なかったのかもね？」

「・・・そ、そうかもですね」

「うん、嫉妬と言っても色々あるんだけど・・・レフイーヤちゃんは、その人に笑顔を向けられてどう思ったのかい？」

「・・・えつと・・・」

「ああ、ごめんね。聞き方を変えようか?　じゃあ、君は何に劣等感を覚えたのかな？」

『劣等感』・・・とても嫌な響きだ。初対面なのにも関わらず棘のある言葉を彼女は理解した上で選んだのだろう。

実際、その言葉はきつと当てはまっている・・・私が今まで何度も感じていたものであるのだから。

「・・・彼女が・・・私よりも、あの人に必要とされている気がしたんです」

「必要？」

「・・・はい。とても、安心して笑っていた気がするんです。まるで彼女があの人居場所である様に・・・」

「・・・君ではなれないのかい？」

「っ・・・分らないです。私は・・・いつも『あの人のために』って考えてるんです・・・でも・・・」

「でも？」

「分らないんです・・・」

「そっか・・・それなら、まずは『あの人』の事をもっと知ることから始めてみるのはいかがでしょうか？」

「もっと知る？」

「そうさ、君は『あの人』についてどれくらい知っているのかな？」
「!?」

核心を突かれた・・・。

気づいていなかったのでは無い。自分を誤魔化し続けて、考えない様にしていったんだ。

確かに私は紫苑さんの事を詳しく知らない。力になりたいと思っているのに本人の事を余り知らないなど矛盾が過ぎるのかもしれない。

だからと言って、知りたく無い訳では無い。

ただ、少しだけ

『怖かった』

紫苑さんは余り自身の事を話さない・・・頑なに避けていた。そんな彼女に無理に聞いたりしたら嫌な気分になってしまうそうで。

・・・それに、きつと彼女は何かを

『抱えている』

何をかは分からない……だけどソレはとても重いものな気がした。私がソレを知ればきつと、彼女に少しでも近づくことはできるのであろう。でも、知ることでも私の彼女に対する気持ちが変わってしまうかも知れない……そんな不確定な不安が、

『怖かった』

「ふーん、どうやら自分でも気づいているんだね？」

「……はい」

「ふむふむ、どうやら君は何かを恐れているのかな？」

「は、はい」

「まあ、私にはその『何か』は分からないが……うん、なんか難しい話になってしまったな……」

「え？」

「よし、簡潔に行こう♪　じゃあ、君は『あの人』に必要とされたい？」

「当たり前だ、いつもそう思っている……そうありたいと思っている。」

「……はい」

「でも君は『あの人』について知るのが怖い？」

あの日だって……角を隠さずに街に出て、蔑む様な視線を……聞くに耐えない悪口雑言を受けても笑顔を崩さなかった。
……どうしてなのか？

「……はい」

「最後に、それを知れば君は彼女を救えるのかな？」

また・・・分からない・・・でも紫苑さんのことを知ること、
少しでも彼女に近づけると思う。

・・・なによりー

「・・・救いたい・・・です」

いつかの決意をまた、噛み締める様に口にする。

「!!・・・そっか、そうなんだね♪・・・なら進まないかね？」

「はいー」

私は彼女を救いたいと決めておいて、それから『何も』していなかった。何をすれば良いのか分からずに唯々行動を先延ばしにしていた。耐えられず逃げた原因のもう一つとして、そんな自分に対して嫌気が刺していたのかも知れない。

本当に自分が彼女を救えることができるのか？そもそも、彼女は救いを求めているのか？

それも・・・分からない

ーでも、

苦しそうだった。

辛そうだった。

なによりも、私が彼女のそんな顔を見て・・・

『気持ち悪かった』

「・・・あ」

「どうかしたかい？」

「え、いや・・・」

「・・・？」

ハッとした。

いつもいつも、『彼女の為に』って考えて何かしようとしていた。それで、彼女が笑ってくれれば私も嬉しかった。

でも、それは・・・

「ピロテース様・・・でも、それって私の自己満足？なのでしょうか？」

「え？・・・ああ、それはそう。でも、そんなものだよ？人間はそれで十分さ♪」

「十分？」

「うん、何かを与える役割なんて神がすれば良いんだからね。君たちは自分自身を満足させれば良いのさ♪」

「そうなんですか？」

「そうなの。・・・あ！ 神以外にもいるとすればーー」

『英雄かな？』

十四話 役割と復讐 珍しく真面目なタイトル!!

「・・・」

雨が止んだ後の大地は空の悲しみを全て押し付けられ、その重みに崩れているようである。

ジユクジユクと裸足で踏み歩く彼はまるでそんな地面を無遠慮に侮辱している様に見える。

自身よりも大きな刀を抱えて彼は行き先もなく、目的もなく、居場所もなく、小さな歩幅でただ歩き続ける・・・

道はない・・・草木をかき分けながら直進して進む。落ちた枝や石などで足裏は刺さったり切れたりして傷だらけになっている。歩きたびに彼を鋭い痛みが襲う。

しかし、彼の歩みに変化はない。痛みを気にしない様子はまるで『人形』だ・・・

「ふんっ えい」

対峙した怪物は刀に振り回される様になりながらも殺した。隙の大きなその攻撃では無傷でいられるはずもなく、身体のとところに出血が見られる。服はまだらに赤で染められていた。

怪物との戦闘は一回では終わらずに十数回繰り返し行われた。その度に傷が増え、彼の命を蝕んでいく・・・

実際、5、6歳の子供が一人で怪物や野生動物の潜伏する森の中に入るなどほぼ『死』に等しい。

満身創痍であるが現在も生きているのは彼が『鬼人』であるが故なのだろう。他の種族に比べてその潜在能力は非常に高い。・・・しか

しそれとは別に彼自身の『異常』さも関係しているのだが。

「あつ……」

……それでも、小さな彼の身体は限界でこれ以上歩ける力は残っていないかった。刀を引きずりながら歩いてきた彼は足がもつれて地面に倒れ伏し、顔面を泥で汚した。

実際、歩き始めてから既に不眠の状態で二日程が経過していて、口にしたものは水のみであった。限界など当に超えている……。

「んっ……」

彼はそれでも進むために身体を起こそうとして細い腕で地面を押しつける……が、「ふっ」と力は入らなくなりグシャッと再び顔面を泥に打ち付ける。

それからは指先一つ動かさなくなってしまった。

だんだんと意識が遠のいていく……思い出すほどの記憶などなく、『目的』の無い彼には一人身動き取れない状況に焦る理由などなく重くなる瞼をゆつくりと閉じていく。

その時……『人形』の彼は思った。

『ぼくはなにっ?』

――

意識を失った彼はそこに無防備に無様に落ちていた。

「ん?・・・おい!! 大丈夫かよ坊主!!」

そんな彼を見つけた一人の男がいた。背中に大きなカゴを背負い中には山菜であろう食材が詰められていた。

どうやら倒れた先が森の山道であつたらしい。そこに偶然男が山菜を撮り終えて山を降りていたところに倒れ、気を失っている子供に会つた。

男は山に一人倒れていた彼を不思議に思っていたが幼い身体に大量に付いた傷を見て心が痛み、事情など後回しにまずは「この子供を助けなければ」と考えた。

人と出会つたこと、それも心優しい善人であつたこと・・・何と言う偶然、何と言う幸運だろうか

彼を拾つた男は彼を担いで自分の集落へと歩き出す。担がれた彼は意識を覚醒させることはなく男に連れられるがままであつた。

彼の幸運は続く・・・

男の集落で暮らす人々は皆優しい者たちで、男の拾つて来た子供を快く引き入れて、貴重なポーションを使用して彼の身体を治療した。

だが、ここまでだ・・・人形の短い幸運はここまで

泥や血で汚れた彼の身体を洗う・・・その時である。

「!？」

彼を洗っていた女が驚愕の表情を浮かべた。

頭を洗う為、前髪を上げてみれば額の両端にぽこつと小さな突起が生えていた。コブだとは思えない程に対照的なそれは鬼特有の『角』に間違いなかつた。

次の瞬間には女の声が集落に響いていた。

「お、鬼の子!!」

叫ぶ声色には恐怖が混じっていた・・・

―黄昏の館前―

「はあ、もうこんな時間になってしまいました」

ピロテース様に相談をさせて頂いた後に少しだけ雑談をしていたつもりが、思いの外夢中になっていた様で館に戻った時には既に日は落ち始め、辺りは朱色に染まり出していた。

忘れていたつもりでは無かったのだが、紫苑さんには悪い事をしてしまったなと落ち込みながら館の門へと足を運ぶ。

「レフィーヤちゃん!!」

「!!」

名前を呼ばれて声の方に視線を向ければ紫苑さんが慌てた様子で私に向かって来ていた。

そんな彼女の様子から私のことを心配して門で今まで待っていたことは考えるまでもなく察することが出来る・・・
ん?・・・私との距離が近い。

ぎゅ

鼻腔をくすぐる甘い香りが私を酔わせる。

(ああ、良い匂い)

「ん……んんっ!」

紫苑さんの胸に顔を押し付けられるように抱かれている。適度な圧迫感と温かさがとても心地いいのだが大幅に供給過多となっている。

名残惜しいところもあるが彼女を引き剥がす。

「あ……ごめんね。……でもよかった、ちゃんと帰って来てくれて」
「……すみませんでした。心配かけましたよね?」

「うん。……でも、私がレフイーヤちゃんに、」

「そ、それは違います! 紫苑さんは悪くなくて……」

「……本当?」

「はい」

「……そっか。でも、ヤな事があつたら言つて欲しいな?」

「……嫌なことなんて……」

「……ん、まあ、取り敢えず入ろっか?」

「……はい」

紫苑さんに館に入る様に促され、夕陽に照らされた彼女の顔が少し茜色に映る様子を横目に歩き出す。

彼女を見ながら私はさつきまでピロテース様と話していた内容をおい出す。『あの人についてもっと知る』……私が今まで逃げてきたこと。そしてそのままではいけないこと、これらを再確認させてもらえた。

『怖い』……知ることが怖かった。でも、この恐れていることをピロテース様は否定はしなかった。まるでそれが当たり前の事である様に……

私の『紫苑さんを救いたい』という、自己満足を成す為にはきつと彼女を知らなくてはいけない。と彼女は私の背を押してくれた……

「・・・あの、紫苑さん・・・」

「何ですか？」

「その、紫苑さんとお話したくて」

「ん？ いいですよ・・・私の部屋でいいですか？」

「シ、紫苑さんのお部屋ですか!？」

――

―紫苑の部屋―

(ああ、緊張します・・・)

私の前に立つ紫苑さんがドアを開けると、私を部屋に入る様に促す。

「し、失礼します」

「ふふ、どーぞ」

ぎこちなく歩き出す私を見て紫苑さんはおかしな様なものを見る様に少し笑っていた。

そんな彼女を見て私は少し羞恥を覚えた。

でも、しようがない。

だって始めてだから・・・

カチャリ

ドアが閉まる音が聞こえた。その後には何故か胸がどきついて、顔に熱が籠り始めた。

この後は唯のお話をするだけなのに私は何かを期待してしまっているのだろうか・・・？

・・・そんな邪なことを考える私自身が恥ずかしくなってより一層顔を紅くしてしまった気がする。

「ん？ どうかしました？」

「えっ!? い、いえ何でもない・・・です」

「そう？ なら良いんですが・・・どうぞ、ここ座ってください」
「は、はいっ」

紫苑さんに促されるままに椅子に座る。

ソワソワと少し落ち着かない感じがして、部屋の中を見渡してみる。

私の部屋とは内装が異なっている部分が多くあるのだが、そんなことよりも・・・

モノが少なすぎる。

部屋の棚などには何も置いていない。今座っている椅子や目の前の机も多分備え付けのものであろう。

また、ベットを見てみれば綺麗に整えられていてシワの一つも見つからないほどである。いくら綺麗好きといえどもやりすぎに思えてしまう。

あまりにも生活感のないため本当に彼女がこの部屋で過ごしているのかと疑問に思ってしまう。

この部屋はまるで・・・

いつでも・・・

『消えられる』

そう、感じられた。

「それで？ 何のお話ですか？」

「あ、えっと……」

「あ！ 並行詠唱です？」

「そ、それは教えて貰いたいですが……違います」
「？」

「……紫苑さんの事を教えてもらえませんか？」

私はきよとんとした様子で対面に座る彼女に向けてはつきりとそう伝える……

すると、彼女の纏う雰囲気は先程までの暖かいものから冷たいものへと変化して同時に部屋の温度が下がったかの様に肌に冷気をかんだ。無表情のまま目を少し細めて、私に対して疑いをかけるかのような視線を向ける。

ドクンツと心臓が強く締め付けられる。

「……それは、どうして？」

「っ……紫苑さんの事を知りたいからです」

「……誰かに私について聞きました？」

「？ いえ、聞いて無いですけど……」

「……そうですか、なら良いです」

「？」

普段の彼女との会話では想像つかないほどの冷たい声だった。そんな声を聞いて緊張を覚えたが、それを押し殺して彼女の問いに思いのままに答える。

すると、少し彼女の雰囲気や和らいだ。

彼女の質問は少し意図が掴めないものであったが、彼女が機嫌を損ねていことから特に問題はなかったらしいので、気にしなくてもいいのかな？

「それで、私の何が知りたいんです？ 今日のお詫びに何でもお答えしましょう！」

「ありがとうございます！ それでは・・・」

『何でも』と言ってはくれているが、余り踏み込んだ質問をしてしまえば彼女を困らせてしまうかもしれない。

配慮しつつ、私が知りたいもの・・・そして彼女の力になる上で必要そうなもの・・・

「えっと、たまに紫苑さんが街に一人で行く時に・・・その、『角』を隠さないのってどうしてなんですか？」

「・・・えーとね」

・・・踏み込み過ぎの質問だったかも知れない。

紫苑さんは頬に人差し指を当てて困っている様な表情を見せた。

「あつ、すみません！ 言いたくないのでしたら・・・」

「大丈夫ですよ、何でも言った手前ですからお答えします」

「・・・そうですか」

「はい・・・まあ、その・・・端的に言えばオラリオの人と親睦を深めようとしていた為です」

「・・・親睦」

親睦？・・・あれが？

確かに、紫苑さんは笑顔を周りに振り撒いてはいた。だけど周りの人たちは紫苑さんに向けて聞くに耐えない悪口雑言を投げつけていた。

あれは親睦などではない……ただ彼女が傷つけられているだけだ。

「どうして親しくしようとするんですか？　紫苑さんはそんなに……積極的に交友することは無かったですよね？」

「そう、ですが……レフイーヤちゃん中々痛いところ突いてきますね」

紫苑さんはダンジョンに行かない日の殆どをここ（黄昏の館）で過ごしている。何をしているかと言えば読書だろうか、私が書庫に本を取りに行った時にたまに彼女が居たりする。他にはアイズさんと戦闘訓練していたり？

まあ、何を言いたいかというと、紫苑さんは一人で過ごしていることが多くて関わるとしても特定の人のみであることだ。この特定の人とはファミリア内でもごく僅かである。

それに、彼女自身も『鬼人』が周囲からどう思われているかを最も理解しているはずなのだ。

そんな彼女が不特定多数に対して関わりを持つとうとするなど普段の彼女から逸脱しすぎていて、理解し難かった……

「えっと……ですね。　ほら、やっぱり私の種族が怖いって感じている人が多いのでそんな人を減らせればいなくて……ですかね？」

彼女の言っていることは嘘では無いとは思うのだが、それだけでは些か浅い目的に感じられた。多分他の理由を彼女は隠している……現に、私が聞き返した後の彼女は首に触れたりして少し落ち着きのない様に見えた。

「……分かりました。言います……が」

「……」

「……絶対に笑わないで下さいね？」

「？」

『笑う』？

的外れな言葉に思えた。今までの会話で笑う要素は全く無かったし、これからの話で笑うことなど思い浮かばない。

(何だろう)と私の頭が『？』で埋め尽くされる。

「絶対ですからね？」

「・・・は、はい。 笑いません」

紫苑さんに念押しをされて今までと異なつた緊張が走り、ピンツと背筋を無意識に伸ばしていた。

紫苑さんは少しばつの悪そうな顔を見せてから口を開いた・・・

「・・・私・・・『英雄』になりたいんです」

「・・・」

『エイユウ』？

『エイユウ』ってあの『英雄』？

童話に出てくるあの？

街の子供が憧れてごっこ遊びをしているあの？

誰が？

紫苑さんが？

「・・・んっ・・・っふふふ」

「あっ!! 笑いましたね!？」

「ふふふっ・・・ごめんなさい。 だって・・・っふふ」

「また!」

「・・・紫苑さんが「英雄に」なんて言うから・・・ふふ」

「もう、レフィーヤちゃんなんて知りませんから!」

紫苑さんには悪かったが笑わないでいる方が難しい・・・
だって、少し幼さが残る顔立ちであるが、いつも頼りになってお姉さんの立ちな位置な彼女が小さな子供が憧れる様な・・・言ってしまうと幼稚な夢を真剣な表情で明かしたのだ。自分の紫苑さんに対する印象との大きすぎる差に笑いが堪えられなくなってしまった。

「はあ、はあ、もう笑わないので許してください・・・」

「・・・嫌です！」

「紫苑さ〜ん」

私が笑った事で拗ねてしまった紫苑さんに謝っているが機嫌は直ぐには治りそうも無かった。しかし、幼い子の様に拗ねている紫苑さんは新鮮で可愛くて、彼女には悪いが私は少し良い気分であった。

笑いに意識を取られ過ぎていて思考が頓挫してしまっていたが、ふと我に帰ると『英雄』になる為に人々と親睦を深める必要があるのか」と疑問に思った。

「・・・紫苑さん、気になったんですけど・・・『英雄』になるのにそこまでして親しくなる必要があるんですか？」

「・・・」

「紫苑さ〜ん？」

「・・・はあ、分かりました。えつとですね、私の為らないといけない『英雄』は強いだけでは駄目なんです。人々に賞賛されたり、希望にならないといけない・・・ただ力を持っていても・・・」

「？」

「私・・・鬼人が『英雄』と言えるほどの力を持っていたら・・・恐怖でしかないでしょう？」

「・・・」

L v . 5であり、魔法剣士の彼女は戦場で作戦の重要な場面を担うことが多く、ファミリアの戦力に大きく影響を与えている事は言うま

でもない。

私自身もつい彼女を頼りにしてしまうことが多々ある。

今までは思いもしていなかったが、先程の彼女の話聞いて気付かされた。．．．確かに私が彼女を恐れていないのは同じファミリアで居るからこそその関係で成り立っていたのだろう。

今となつては恥ずかしいのだが、私が『ロキ・ファミリア』に入団した当初は『鬼人』である紫苑さんに対して忌避感を覚えていた。しかし、そんな時に私の指導係としてリヴェリア様．．．そして紫苑さんが担当する事となった。最初は困惑していたが、段々と関わっていく中で彼女が『鬼人』であることなど気にすることなど無くなるほどに親しくなつた。

しかし、もしも彼女が私と異なるファミリアであつたならば恐怖まではないかなくとも、間違いなく不安感は覚えていたと思う。『鬼人』であるだけでも恐怖感を煽るのに、第一級冒険者なのであれば他のファミリアに脅威であると認識させるには十分な要素である。

その上、恩恵を持たない一般人はきつと冒険者以上にそんな存在を恐れている筈だ．．．

「うん．．．ですので、関わることで少しでも変化があれば良いかなつて．．．ね?」

「．．．そう、だつたんですね．．．でも!!」

「分かつてるよ」

「っ．．．」

「見てた．．．聞いてたんでしよう?」

「．．．はい。街の人が皆んな．．．紫苑さんに．．．」

「うん、中々うまく行かないんですね」

自分に向けられていた悪口雑言に気付いていたらしい。しかし苦笑の顔を作りつつ軽く流す。彼女の今までの経験による慣れなのだろうか．．．私にはそんなに何事もなかったかの様に笑う彼女が理解できなかつた。

傷ついていないのか？いや、そんな筈はない・・・きつと。
そして、何よりも・・・

「どうして・・・どうしてそこまで『英雄』にこだわるんですか？」

「・・・私の

『役割』

で

『復讐』

だから、です」